

日本質的 心理学会 11回大会

再び
廻りだす



10月18日 土
10月19日 日
松山大学8号館



開催のご挨拶

第11回大会は学会創立10周年を折り返した最初の大会となりますので、大会テーマは「ふたたび遍（めぐ）りだす」としました。四国松山での開催は初めてですが、折しも「四国遍路開創1200年（<http://www.88shikokuhenro.jp/1200.html>）」と、愛媛県と広島県をまたがる瀬戸内海の「しまのわ2014（<http://www.shimanowa2014.jp/>）」の年に当たりました。偶然とはいえ、質的心理学の次の展開を示唆するように、ゴールに向かって直線的に上昇していくのではなく、同じルートを何遍もめぐりながら、多様な交流と出会いを積み重ね、ゆっくりと螺旋的に変化していく輪のイメージと重なります。大会ポスターも遍路と瀬戸内海をデザインにしました。

まず、会員のみなさまには、当初学会開催を予定していた10月10～12日を18日～19日に変更したため、多大なご迷惑をおかけしたことについて、心からお詫びいたします。開催日程の決定後に、青年会議所（JC）全国大会が松山で開催され、一万人以上の参加が見込まれることがわかり、宿泊や公共交通機関の利用がほとんど不可能になることが確実になったからです。もっと事前に情報収集をしておくべきだったと悔やまれます。しかしながら、急な変更にもかかわらず、会員の皆様の温かいご理解とご協力によって、最終的にポスター発表が87本、会員企画シンポジウムが8本と、シンポジウム合計で13本を数えました。この状況から考えると、大会当日は多くの会員の皆様が松山に来られるものと期待されます。準備委員会としても、うれしい悲鳴をあげています。

本大会では、学会の各種委員会と大会実行委員会の主催するシンポジウムの他に、会員が能動的に参加する形式のワークショップを試みに導入しました。また、大会基調講演として、正岡子規の生誕地である松山にちなんで、アーサー・クラインマンの訳者でもある江口重幸氏に「正岡子規と病いのナラティブ」の講演を依頼しました。また、本学会に創立当初から貢献されてきた麻生武氏に「＜痛み＞の概念の獲得と新しい＜身体＞」という演題で大会記念講演をお願いしました。ポスターセッションでの出会いと交流はもちろん、本大会の多様な企画を通して、ナラティブ研究を中心とした、会員のみなさまの研究の深化に少しでもお役に立てば幸いです。短い会期ではありますが、瀬戸内海の新鮮な海の幸に舌鼓を打ちながら、創造的な議論にぜひ花を咲かせましょう。

日本質的心理学会第11回大会実行委員会委員長 山田 富秋

目次

開催のご挨拶	1
1. 大会参加者へのご案内	3
2. 大会企画概要	5
3. 松山大学キャンパス案内	7
4. 8号館会場案内	8
5. 大会スケジュール 一覧表	9
6. 大会プログラム	11
7. 各企画の抄録	
(1)講演	13
(2)講習会	14
(3)ワークショップ	15
(4)ポストセミナー	16
(5)シンポジウム	18
(6)ポスター発表	47

1. 大会参加者へのご案内

大会テーマ 「ふたたび遍（めぐ）りだす」

第 11 回大会ホームページ：<http://jaqp2014.wix.com/jaqp2014>

日本質的心理学会ホームページ：[http:// http://www.jaqp.jp/](http://http://www.jaqp.jp/)

大会日程・開催場所・主催等

会期：2014 年 10 月 18 日（土）・10 月 19 日（日）・10 月 20 日（月）

会場：松山大学文教キャンパス 8 号館（全日）

主催：日本質的心理学会

受付

場所 8 号館 4 階ホール

時間 10 月 18 日（土） 9:00～17:30

10 月 19 日（日） 8:30～17:00

＊学会入会手続き、その他学会や大会に関するご質問等も受付の学会事務担当者が承ります。

＊事前申し込みをされた方は、受付にて交付された参加証（ネームカード）をご提示ください。当日参加の方は、下記の参加費を申し受けます。

【大会参加費】

当日参加

一般会員 ￥4,500 学生会員 ￥3,500

一般非会員 ￥5,500 学生非会員 ￥3,500

＊なお、学生の方は学生証の提示をお願い致します。聴講生・研究生は学生に含みます。

＊大会期間中のお知らせや変更などは、受付の大会掲示板にてお知らせいたします。

＊大会当日の開始時間前後には受付が混雑することが予想されます。時間にゆとりをもってお越しくださいますよう、お願い申し上げます。

大会本部および大会事務局

8 号館 4 階 840 に、大会本部および大会事務局を設置します。また同時に、日本質的心理学会デスクを 4 階ホール受付に設置して新規入会受付を行います。

総会

大会 2 日目の 12:15 より、8 号館 2 階 821 教室にて総会を行います。会員の方には、お弁当とお茶をお出しします。お時間の許すかぎり、ぜひご参加ください。

クローク

大会期間中、8号館4階の840教室にクロークを設け、みなさまの荷物をお預かりいたします。ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理いただきますようお願い致します。

【利用時間】

10月18日（土）9:00～17:30

10月19日（日）8:30～17:30

懇親会

大会1日目の18時より、8号館に近いカルフル（生協食堂）にて懇親会を開催いたします。瀬戸内海の新鮮な海の幸はもちろん、ご当地グルメ、地酒や地ビールなども取りそろえておりますので、多くの方々の交流の場になるよう、ぜひご参加ください。なお、当日参加の方は下記の参加費を申し受けます。

【懇親会参加費】（会員・非会員の区別はありません。）

当日参加 一般会員 ￥4,000

学生会員 ￥3,000

昼食

大会1日目の昼食については、限定メニューにて11:00～13:30までのあいだ、カルフル（生協食堂）が利用できます。また、大学近辺にコンビニが多数あります。

大会2日目の昼食については、総会出席者にお弁当を配布します。また、カルフル（生協食堂）は閉店になり、利用できません。近辺のコンビニをご利用ください。

喫煙に関するご注意

8号館での飲食は可能ですが、なるべくゴミはお持ち帰りください。また喫煙場所は8号館横の学生会館裏手駐輪場にあります。地図をご覧ください。喫煙は他の場所ではできませんので、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

会員控え室

本大会では、ホットコーヒー、ポンジュース、冷たい麦茶を提供する会員控え室をご用意しております（8号館3階東側、学生談話室）。ぜひご利用ください。

書籍の展示・販売

会員控え室の8号館3階学生談話室にて、大会期間中、書籍等の展示・販売を行います。ぜひお立ち寄りください。

2. 大会企画概要

第 11 回大会では、講演、シンポジウム、講習会、ワークショップ、個人発表、ポストセミナーを下記のとおり企画しております。

【講演】

四国松山での開催を記念して、江口重幸氏による大会基調講演「正岡子規と病いの語り」を、また、大会記念講演として麻生武氏による「＜痛み＞の概念の獲得と新しい＜身体＞」の 2 本を企画しております。

【シンポジウム】

本大会では、大会実行委員会企画シンポジウムをはじめとし、一般公開の日本保育学会との共同企画シンポジウム、各種委員会企画のシンポジウムや、会員企画シンポジウムを企画しております。それぞれのテーマ、時間、開催場所については、シンポジウム抄録をご確認ください。

*シンポジウムの各部屋には、マイク、ディスプレイ、PC 入力端子が設置されています。パソコンを利用される場合は、各企画者が持参してください。

【講習会】

本大会では、2 つの講習会を企画しております。1 つは好井裕明氏による「被爆問題ドキュメンタリーを読み解く試み」で、もうひとつは西村ユミ氏による「現象学的研究の考え方と分析方法」です。詳細は大会抄録集の講習会・ワークショップをご参照ください。

【ワークショップ】

本大会の試みとして、関心を持った会員がその場で参加できるワークショップを導入します。土屋雅子氏による「Thematic Analysis 入門」と、石川良子氏による「調査の方法と倫理を問い直す―調査現場での経験の語り合いに根ざして―」の 2 本を企画しておりますので、詳しい案内は、当日会場にて説明を受けて参加してください。

【ポストセミナー】

研究交流委員会の主催するポストセミナーを、大会 3 日目の 10 月 20 日（月）10:00～16:00 のあいだ「M-GTA の展開―分析・概念化・理論化」を 8 号館 872 教室にて行います。このセミナーは予約参加になっております。

【個人発表（ポスター）】

個人発表は、大会 2 日目（10 月 19 日（日））の 9:00～10:30 までのあいだ、8 号館 5 階 851・852・853・854・855・856・857・858・859・860 教室にて行います。一部屋に 10 本のポスターを掲示します。発表者は、この抄録集にある部屋番号とポスター掲示番号の対応表を参照して、自分の発表の割り当てられた部屋において、ご自分のポスターの前で応対してください。

***優秀ポスター賞は、理事の方と実行委員会の投票によって選出されます。その後、ポスター賞を受付前の掲示板に掲示して発表します。**

パネルサイズ

一発表につきご使用いただくパネルサイズは、よこ 85cm・たて 200cm となっております。（A 0 サイズ 84.1×118.9cm が入る大きさです）。このパネルの範囲をご自由にお使いください。なおポスターは、18 日 17 時～18 時、または 19 日 8:30～9:00 のあいだ、発表者ご自身でポスターの画鋏留め、もしくはテープ留め作業を行ってください。留め具は会場にて用意いたします。

***10:30 で掲示が終了した後は、すぐにご自身でポスターをお持ち帰りください。11:00 にパネルの撤去を始めます。もし取りに来られない場合は、こちらで対応させていただきます。**

【各費用の振込先】

ゆうちょ銀行の口座から振込あるいは現金で振込の場合

ゆうちょ銀行 口座記号番号 01600-9-100979

口座名称 日本質的心理学会松山大会実行委員会 (ニホンシツテキシンリガッカイ マツヤマタイカイ
ジッコウイインカイ)

ゆうちょ銀行以外の金融機関から振込の場合

受け取り口座店名 (店番) 一六九 (イチロクキュウ) 店(169)

預金種目: 当座

口座番号 0100979

お問い合わせ先

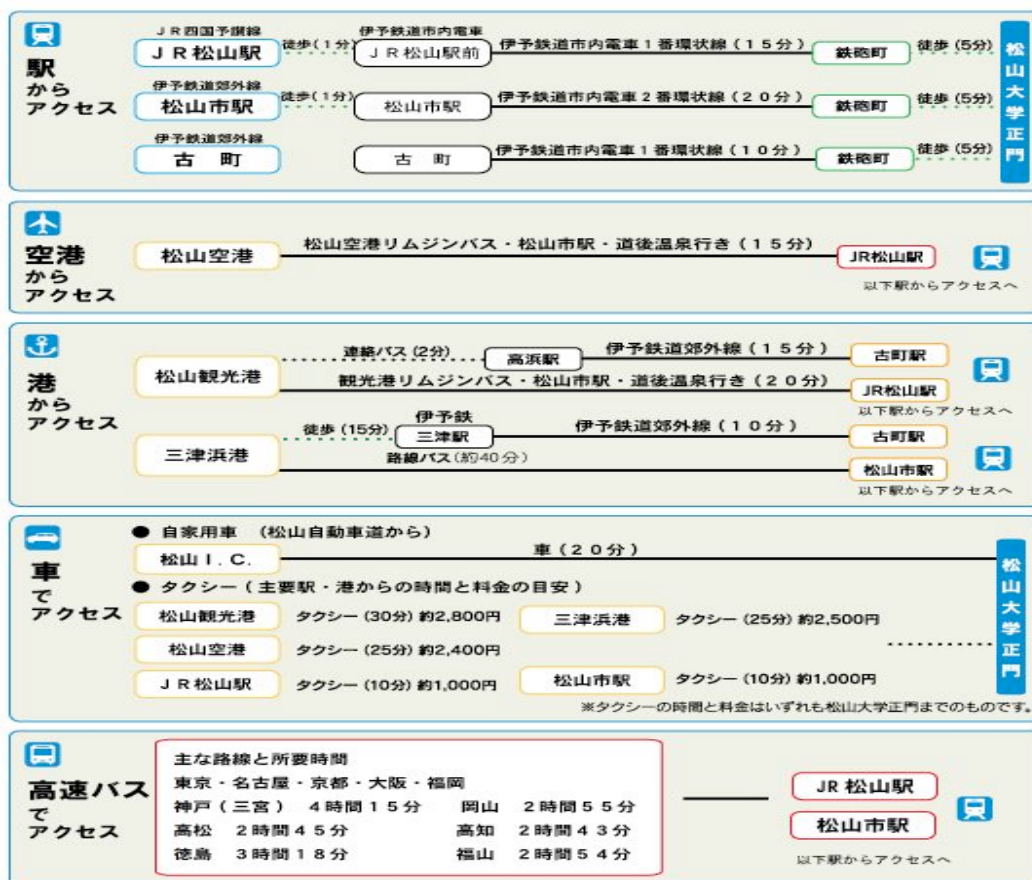
日本質的心理学会第11回大会準備委員会事務局

愛媛県松山市文京町4-2 松山大学人文学部社会学科山田研究室内

Email: jaqp2014@karilab.ed.ehime-u.ac.jp

会場 (松山大学文京キャンパス) までのアクセス

学会会場までのアクセスは、<http://www.matsuyama-u.ac.jp/gaiyou/ricchi/ricchi.htm> をご覧ください。以下の通りです。なお、飛行機の最終便は現時点で、羽田 19:30、成田 19:40、伊丹 19:35、関西 20:35、中部国際 17:35、福岡 20:20、沖縄 10:45 です。広島港までの高速フェリー最終便は、21:00 です。



3. 松山大学キャンパス案内



4. 8号館会場案内

5階 ポスターセッション

階段	860	859	858	857	階段 E V	W C
856	855	854	853	852	851 講習会(西村)	850

4階

845 シンポ（好井・桧田） シンポ（『質的心理学フォーラム』編集委員会） シンポ（鮫島）／シンポ（福田）	844 シンポ（日本保育学会と共同） シンポ（荏田） シンポ（青山）／シンポ（小島）	受付		階段 E V	W C
843 ワークショップ（土屋）	842 ワークショップ（石川）	841 講習会（好井）	840 クローク 大会本部		

3階

階段 W C		階段 E V		書籍販売
学生支援室（ピア）		会員控え室		書籍販売

2階

821 基調講演／シンポ（宮本） 記念講演 シンポ（宮坂）／シンポ（やまだ）	820 シンポ（桜井・岸） シンポ（伊藤）	階段 E V	
階段 W C			

★ 8号館西隣の学生会館前に自動販売機があります。また、建物内は全面禁煙ですので、喫煙は所定の場所（学生会館裏駐輪場の指定の場所）にてお願いします。

5. 大会スケジュール 一覧表

2014年10月18日(土)

10月18日										
時間	820	821	841	842	843	844	845	851	852~860	872
9:00~(17:30)	9:00~ 受付開始									
9:30~11:00			講習会1 被爆問題・ドキュメンタリーを読み解く試み 講師：好井裕明	ワークショップ2 調査の方法と倫理を問う直す 企画者：石川良子	ワークショップ1 Thematic Analysis 入門 企画者：土屋雅子			講習会2 現象学的研究の考え方と分析方法 講師：西村ユミ		
	休憩									
		基調講演 正岡子規と病いのナラティヴ 江口重幸								
	11:15~12:30									
12:30~13:30	休憩									
13:30~15:30		シンポジウム3 質的心理学研究・実践における「ま」の探求 企画者：宮本匠				シンポジウム1 保育実践の質感と実践研究 日本保育学会・本学会研究交流委員会共同企画		シンポジウム2 質的研究における映像の可能性 企画者：好井裕明・榎田美雄		
	休憩									
15:30~15:45	休憩									
15:45~17:45 (9:00)~17:30	シンポジウム1 フィールドワークとライフストーリー大会実行委員会企画 登壇者：桜井厚・岸衛					シンポジウム2 障がい・支援テクノロジー 企画者：菊田知則		シンポジウム3 質的研究と倫理－対話と葛藤としての研究倫理 企画者：『質的心理学フォーラム』編集委員会		
	クロージング (17:30まで)									
	懇親会（会場：カルフォルト[生協食堂]）									
18:00~19:45										

6. 大会プログラム

大会第1日目 10月18日(土)

9:30～11:00 講習会とワークショップ 教室番号

□講習会

- 1.被爆問題ドキュメンタリーを読み解く試み 講師 好井裕明(日本大学) 841
- 2.現象学的研究の考え方と分析方法 講師 西村ユミ(首都大学東京) 851

□ワークショップ

- 1.Thematic Analysis 入門 企画 土屋雅子(千葉大学) 843
- 2.調査の方法と倫理を問い直す—調査現場での経験の語り合いに根ざして 企画 石川良子(松山大学) 842

11:15～12:30

□大会基調講演 821

「正岡子規と病いのナラティブ」

講演者 江口重幸(東京武蔵野病院)

司会 白柿 綾(和ホスピタル)

13:30～15:30

□シンポジウム I

- 1.保育実践の質感と実践研究 日本保育学会と本学会研究交流委員会の共同企画シンポジウム
: 一般公開 844
- 2.質的研究における映像の可能性 企画 好井裕明(日本大学)・檜田美雄(神戸市看護大) 845
- 3.質的心理学研究・実践における「ま」の探求 企画 宮本匠(京都大学) 821

15:45～17:45

□シンポジウム II

- 1.フィールドワークとライフストーリー 実行委員会企画 桜井厚(立教大学)・岸衛(龍谷大学) 820
- 2.障がい支援テクノロジー 企画 荻田知則(愛媛大学) 844
- 3.質的研究と倫理—対話と葛藤としての研究倫理— 企画 『質的心理学フォーラム』編集委員会 845

18:00～20:00

□懇親会

カルフル1階(生協食堂)

大会第2日目 10月19日(日)

8:30～受付開始

9:00～10:30

□ポスター発表 5階 851～860

10:45～12:15

□大会記念講演 821

「＜痛み＞の概念の獲得と新しい＜身体＞」

講演者 麻生武(奈良女子大学)

司会 山田富秋(松山大学)

12:15～13:15

□総会 821

13:30～15:30

□シンポジウム III

1. コミュニティを編み直す 企画 青山征彦(駿河台大学) 844

2. ＜現場＞を読みとく質的研究の方法論の“勘所” 企画 鮫島輝美(京都光華女子大学) 845

3. 医療分野の研究におけるナラティブ分析 企画 宮坂道夫(新潟大学) 821

4. 被災地の復興の経験とは何か 企画 伊藤哲司(茨城大学) 820

15:45～17:45

□シンポジウム IV

1. 複線径路等至性モデル(TEM)の実践と展開 企画 福田茉莉・安田裕子(立命館大学) 845

2. ＜私＞をめぐる謎を斜めから見る 企画 小島康次(北海学園大学) 844

3. 現代の聖地巡礼ともの語り 企画 やまだようこ(立命館大学) 821

10月20日(月)

10:00～16:00

□研究交流委員会主催セミナー

M-GTAの展開－分析・概念化・理論化－ 872

7. 各企画の抄録

(1) 講演

大会基調講演 18日(土)11:15～12:30 821

「正岡子規と病いのナラティヴ」

講演者 江口重幸（東京武蔵野病院）

伊予松山が生んだ、俳人にして歌人にして文学者の正岡子規（1867 - 1902）は、短い人生に数多くの作品を産み出し豊かな交友関係を築いた。しかし彼の日々は、結核で喀血した自分に、喉の赤い子規（ほととぎす）の名を付けたように、つねに慢性の病い（脊椎カリエス）や激しい苦痛と渾然一体となった生活であり、そこから『墨汁一滴』『仰臥漫録』『病牀六尺』という最晩年の深い輝きを宿した傑作が生み出されていった。演者は子規の著作から、生きること、病むこと、援助することをめぐって汲めども尽きないヒントを与えられてきた。そこには臨床人類学の病いの語りや、ケアや看護、希望や絶望のすべての要素が含み込まれている。子規の呻吟と苦闘、絶叫と号泣。そこから構想された独特なケア論（「介抱」論）。彼を取り巻くケアの達人たちの尽力と工夫…漱石、鼠骨、虚子、不折、そして妹律と母八重等など…。子規の作品群が 21 世紀の今日にいたってもなお、臨床や看護やケアに携わる者に与える大きな影響の源を、これらをたどりながら探りたい。

大会記念講演 19日(日) 10:45～12:15 821

「＜痛み＞の概念の獲得と新しい＜身体＞」

講演者 麻生武（奈良女子大学）

子どもは「イタイ」ということばをどのように獲得していくのだろうか。Wittgenstein（Philosophical Investigations,1953）は「＜痛み＞という概念を、あなたは言語とともに学んだのである」（藤本訳 p.234）と述べている。このことばが正しいとすればその学習プロセスを吟味する必要がある。長男の日誌的観察データの分析から、＜痛み＞の概念が、自己と他者とをつなぐ新しい＜身体＞と密接に絡んで、獲得されて行く経緯を示し、「他者の痛み」とは何か論じたい。

(2) 講習会

講習会 1 18 日(土)9:30～11:00 841

「被爆問題ドキュメンタリーを読み解く試み」

講師 好井裕明（日本大学）

本講習会では、映像をいかに読み解けるのかという発想の下で、一般的な方法論等を議論するのではなく、具体的な素材による私自身の例証を通して、読み解きのありようの一つを実感していただければと考えている。

私自身、ここ数年原爆映画や被爆問題ドキュメンタリーの解説を試行しつつあるが、今回は、被爆女性と写真家との交流をテーマとしたあるドキュメンタリー（39 分）をとりあげる。まずは、作品全体を視聴していただいた後で、私がいかなる関心から、作品が伝えるあるシーンの読み解きをなぜ興味深いと考えたかなどをお話したいと思っている。

もちろん、ドキュメンタリーなどの映像を読み解く場合、読み解く当事者の問題関心が基本であり、同じ映像を誰でも同じように解説できるものではない。問題関心が異なることで、その結果もそれぞれに異なってくると言える。今回も具体的な作品を視聴されたみなさんが、自分であれば、どのような関心で、他にこのように読み解くことができるはずだ、という各自の“試み”を考えながら、話を聞いていただければと思う。

講習会 2 18 日(土)9:30～11:00 851

「現象学的研究の考え方と分析方法」

講師 西村ユミ（首都大学東京）

「事象そのものへ」あるいは「事象そのものの方から」、我々の経験の意味を捉え直し、それを記述的に開示していくのが現象学的研究であり、その方法である。本講習会では、現象学的研究において、いかに事象そのものへ向かい、いかに事象そのものの方から求めてくる探究の視点や分析の切り口を得るのかについて、一つの例をもとに議論しつつ、分析を試みる。そもそも現象学的研究では、既存の研究枠組みの課題を指摘しつつ事象そのものへ立ち帰り、そこから経験の構造や成り立ちを捉え直して記述する。この「敢えて」行うことの意味は十分に議論される必要がある。その議論を通して、ある研究において、なぜ現象学的研究が必要であるのかが明らかになり、また、いかなる視点からの探究が求められるのかが見出される。それ故、この研究の入り口（研究目的から方法へ）と、その議論からデータ分析に絞る。

(3) ワークショップ

ワークショップ1 10月18日(土) 9:30~11:00 843

「Thematic analysis 入門」

講師 土屋雅子(千葉大学大学院看護学研究科)

Thematic analysis とは、階層的なコーディングを通して事象のパターンを探索し、主に意味や概念に着目しながら抽象的な主題へと発展させる質的分析手法である。これは、さまざまな分野で古くから使われているが、わが国での認知度は高くなく、調査研究で活用している者はあまりいない。そこで、ボヤツィス(1998)の提案する Thematic analysis を体験するワークショップを企画した。

ボヤツィスの Thematic analysis の強みは、分析のプロセスが可視化できるため、分析者自身、あるいは第三者によって検証できることである。更に、演繹的、帰納的、両者を合わせたハイブリッドな分析方法や、ミックスドメソッドにおける活用など flexible な点が挙げられよう。本ワークショップでは、Thematic analysis の基本事項を紹介し、逐語録を用いたコーディング・分析を体験する場を提供する。

ワークショップ2 10月18日(土) 9:30~11:00 842

「調査の方法と倫理を問い直す——調査現場での経験の語り合いに根ざして」

講師 石川良子(松山大学)

近年、調査の方法や倫理をめぐる従来の議論には収まりきらない現実が生起していると感じる。その背景には調査を取り巻く社会的状況の変化があり、たとえば学問に対する信頼の低下や当事者研究の隆盛といったことが考えられる。調査者が学問という名のもとに何をなしているのか、いっそう厳しく問われるようになっており、と同時に、調査者—被調査者関係のあり方も問い直しを迫られている。これまでの議論は調査者を常に優位に置き、ともすれば「調査者＝加害者／被調査者＝被害者」という二項対立を前提としていた。しかし、調査を行ってきて、調査者のほうが弱い立場に立たされることは決して珍しくないという実感がある。このほかにも従来の枠組みをはみ出すような様々なことを、私たち調査者はすでに経験しているのではない。しかし、そうした経験を率直に語り合うことのできる場は意外に少ないように思う。このワークショップでは、まずは調査現場で各自が経験していること——それは言語化される以前の漠然とした違和感や戸惑いであってかまわない——を共有し、そのうえで既存の枠組みに囚われない「よりよい調査」の模索へとつなげていきたい。

(4) ポストセミナー

10月20日(月)10:00~16:00 872

研究交流委員会主催セミナー

M-GTA の展開－分析・概念化・理論化－

【概要】

M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) が、自分のやりたい研究に適していることは確認できたし、「分析テーマ」や「分析焦点[者]」の設定も理解したが、「分析ワークシート」を使った概念化がうまくできない……概念が山ほどできてしまった……概念や理論全体に「うごき」がないと指摘されたが、どういう意味なのだろう……？ M-GTA による分析を展開する上で直面するこうした問題について、講師と参加者で一緒に検討していきます。

【講師】

山崎浩司 (信州大学医学部准教授)

信州大学医学部准教授。M-GTA (実践的グラウンデッド・セオリー) 研究会世話人。

専門は死生学、医療社会学、質的研究方法論。ホームページ: <http://researchmap.jp/HRY>

＊質的研究方法論に関する近年の業績 (日本語のみ):

1. 山崎浩司・星野明子:「質的研究とそのデザインはこう使おう」桂敏樹・星野明子編『かんたん看護研究』, 南江堂, 2012年, 111-147.
2. 山崎浩司:「医療研究と質的研究—その関係に見る苦難と意義」『質的心理学フォーラム』4号, 2012年, 28-35.
3. 山崎浩司:「研究の技術(4) 質的研究の技術 2—分析編」『日本認知症ケア学会誌』10巻4号, 2012年, 490-496.
4. 山崎浩司:「研究の技術(3) 質的研究の技術 1—基本編」『日本認知症ケア学会誌』10巻1号, 2011年, 106-113.

【参加費】

日本質的心理学学会会員は2,000円、非会員は4,000円。

【タイムテーブル】

- 10:00-10:40 第1部 参加者の自己紹介 (1人1分30秒)
- 10:40-12:30 第2部 グループワーク 事前課題③のディスカッション
- 12:30-14:00 第3部 講師による講義
分析ワークシートによる概念化と理論的メモ(ノート)にもとづく理論化
- 14:00-14:30 コーヒーブレイク
- 14:30-16:00 第3部 ディスカッション 概念および理論の質問

【テキスト】

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』、弘文堂

【事前課題】

- ① 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂. を、（過去に読んだことがあっても）必ず通読・熟読してください。
- ② 上記文献の 3. と以下の文献を読んでください。
 - ・酒井都仁子・岡田加奈子・塚越潤（2005）「中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析」『学校保健研究』47(4): 321-333 頁.
- ③ 上記の（酒井他, 2005）以外の M-GTA による研究論文（学位論文や外国語論文は除く）を一つ選び、（1）結果として示されている概念／カテゴリー／理論に納得がいくか、納得がいかなければなぜなのか、（2）結果としての理論はどのような現場で応用可能なのか、現場の人間が研究とは無縁な人間であってもその理論を応用できそうか、について説明してください。（M-GTA 論文の検索には m-gta.jp/research.html も参考にしてください。）

(5) シンポジウム

シンポジウム I 18 日（土）13:30～15:30

シンポジウム 1 日本保育学会と本学会研究交流委員会共同企画シンポジウム 一般公開 844

保育実践の質感と実践研究 ―我々は何を問い、記述し、共有できるのか―

企画・司会：古賀 松香（京都教育大学）

話題提供者：佐々木 晃（鳴門教育大学附属幼稚園）

松本 信吾（広島大学附属幼稚園）

掘越 紀香（奈良教育大学）

指定討論者：大倉 得史（京都大学）

□ 企画趣旨

この度、日本保育学会と当学会研究交流委員会との共同企画シンポジウムを、「保育実践の質感と実践研究―我々は何を問い、記述し、共有できるのか―」というテーマで開催いたします。日本保育学会は会員約 4,000 人という会員数の多い学会ですが、その会員には大学等の研究者の他、幼稚園・保育所等で保育を行っていたり児童相談所等で子育て支援にあたっていたりする実践者が多く会員として活躍しています。年 1 度の大会では、毎年多くの実践者による実践研究の発表がなされ、子どもの育ちやそれにかかわる保育のあり方等が検討されています。しかし、そこで常に向き合わざるを得ないのは、実践者の身体に蓄積されている実践の質感を、何を問うためにどう記述・表現し、それによって共有できる知とはどのようなものか、という実践と研究のあいだの問題です。保育実践においてはまさに中核にある実践の質感を、どのように取り扱うことが実践研究として意味のあることなのでしょうか。

一方、当学会は、さまざまな社会的実践に根ざした研究やそのためのツールを提示してきました。しかし、その多くは実践者ではない研究者が、そこにある実践をどのようにみとり、ききとり、記述するか、ということを中心としており、当事者による研究についてはまだそれほど議論されてきていないのではないのでしょうか。保育実践研究は客観性や信頼性、記述の妥当性といったことが課題とされやすい性質があります。そこにどのような光や道筋を照らし出すことができるのでしょうか。

今回、日本保育学会から 2 人の実践者の方をお迎えしました。実践者による保育実践研究は、主に事例記録を資料としています。書きぶりの異なるお 2 人の事例の記述や表現を題材として、書き手と読み手（実践者と研究者、実践者と実践者）が対話します。果たして、書き手の伝えたかった実践の質感は、読み手にどのように読み解かれるのでしょうか。はたまた、保育実践研究から読み解かれる実践の質感は、共有の知として現場に還っていくことが可能なのでしょうか。フロアのみなさまと共に考えてみたいと思います。

□ 話題提供

保育の「事実」と「真実」の間にあるもの

佐々木 晃（鳴門教育大学附属幼稚園）

私は仕事柄、保育の場面で起こった事柄を必然的に他者とその「事例」をシェアしあっている。当事者である子どもと私が直にその出来事を見つめることもあるし、他の子どもや保育者、親たちに伝えることもあ

る。語るという手法をもって表現することもあれば、記録として記述することもある。近年はデジタル写真やビデオ録画を活用することも多い。いずれにしても、記録者の意図によって記憶されたり、書かれたり、写されたりした、「私の得られた限りの情報」をもってあらわそうとすると、私が知覚することのできた事実を、いかに保育の真実として表現するかが最大の関心事になってくる。また、このような保育のリアリティーを表現するためには、記録者の側の視点や語り以外の何ものかが「事例」の中や外に存在する必要が感じられる。今回は私自身の「事例」記述のプロセスとそれまでの表現方法の変遷について述べたい。

保育実践は他者に伝わるのか

松本 信吾（広島大学附属幼稚園）

保育実践者が保育を記述する意味はどこにあるのでしょうか。単に実践しているだけなら、記述の必要感はありませんようにも思います。それでも、記述したい積極的な意味は、私にとっては次の3つです。

- ①保育の喜びを伝えたいから 自分の保育を見直したいから
- ②保育者としての自分の存在意義を確かになりたいから
- ③保育という実践の中身を知ってもらい、理解してもらいたいから 保育を壊されたくないから

研究者が切りとる子どもの姿は、その子どもを全く現していなくて本当にながっくりする思いを何度もしてきました。かと言って、私も含め実践者のエピソードも、きれいに描かれすぎていて保育の営みを表していないように感じてきました。今回は、私が記述した一人の子どもの連続するエピソードを読んでもらうことで、読み手に保育の営みやその子どもの育ちがアクチュアルに感じられるかを問い、これをたたき台にしてどのようなものが伝わるか、共有できるのかを考えたいと思います。

保育実践事例から「質感」を感受する：「そのとき」と「これから」の共有を目指して

堀越 紀香（奈良教育大学）

保育の場で研究する場合、保育者であれ、研究者であれ、文字記録である保育実践事例を取り上げることは多い。今回は、保育実践者によって記述された事例とその考察を通して、読み手である筆者は何を読み取ることができたのか、その現場の「質感」をどのように感受したのかについて提示したい。

保育実践事例のスタイルは様々であり、実際松本氏と佐々木氏の事例では、異なったスタイルで保育の営みや子どもの育ちが描き込まれている。それぞれの事例から、「そのとき」の子どもの思いや「そのとき」に込められた保育者の願いを読み取るとともに、どのような「質感」を感受し、そのことが事例の解釈プロセスでどんな影響を与えたかについて、読み解いていく。そして、保育者の伝えたい真実へ近づき、時に覆されながら共有することを目指し、「これから」をともに生成する位置取りを探っていきたい。

『質的心理学研究』編集委員会企画シンポジウム＝第16号特集、連動シンポジウム＝
質的研究における映像の可能性

企画者：好井裕明氏・榎田美雄氏

話題提供者：平本 毅（京都大学）

・山内 裕（京都大学）

北村 隆憲（東海大学）

岡部 大介（東京都市大学）

・南部 美砂子（はこだて未来大学）

・原田 泰（はこだて未来大学）

・松浦 李恵（東京都市大学大学院）

□企画趣旨

社会学や心理学、教育学、工学のような諸学問、あるいは福祉、看護、医療、法といった諸現場において、映像を用いた研究や実践が、近年、機材とソフトの飛躍的な発展にともない可能になり、かつ、重要性を増してきている。また、研究の素材としてだけでなく、研究成果の提示時における方法としても、動画を含めた映像を活用することが増えてきている。これらのことは質的研究において、質的なものへのアクセスとアプローチの革命的な変容であるとも言えるだろう。

しかし他方で、こうした逐次的変容に対し、実践の増大に見合った総括的議論は、十分にはなされてきていないようにも思われた。

本シンポジウムでは、質的研究における映像の可能性について、「サービスエンカウンター」、「法」、「RTV（リアルタイム・ビデオ）」の3つの領域から、それぞれ最新の研究手法に関わった話題提供をして頂く。報告とその後の議論を通して、映像資料をどのようにして社会問題研究や文化研究に活用するのか、および、映像をどのようにして、研究成果の呈示において活用するのか、の両面からの議論を深めていきたい。動画を用いた研究報告には、時間がある程度必要であるということもあり、また、フロアとの丁々発止の質疑に期待するという方針もあって、今回は、コメンテーターは特におかない予定なので、お集まりの先生方にはぜひとも積極的なご発言を御願いたい。

なお、本シンポジウムは、2015年10月締切の『質的心理学研究』第16号特集「質的研究における映像の可能性—映像で、映像を、映像によって—」との連動企画である。つまり、参加して頂ければ投稿テーマをイメージしてもらい助けとなるよう全体が編成されているが、それ以外に、投稿をお考えになっている会員の方から、自らの投稿アイディアに関するご発言があれば、そのアイディアに関しての質疑をすることも、若干は可能であろう。そういう展開予想からは、投稿を検討している会員の方々向けの「特集号内容説明会」としての意味もあるので、第16号向けに投稿予定のある会員は是非とも、お集り頂き、投稿内容の具体化を進めて頂ければ、とも思っている。

□話題提供

サービス業店舗のビデオ研究の価値と実際

平本 毅（京都大学）・山内 裕（京都大学）

我われは、サービス業の接客場面をビデオ機器により収録し、このデータを会話分析の立場から分析して

いる。本研究ではこの試みの概要を説明するとともに、具体的な分析例を紹介し、これらを題材に接客場面に
対しビデオを用いた調査を行うことの意義を論じたい。筆者らがこれまで分析してきたサービス業は、江
戸前鮎屋（平本・山内、in press）、ハンバーガー屋（平本・山内・北野、in press）、クリーニング屋、イ
タリアンレストラン、透析クリニック、スーパーマーケットなど多種に渡る。我われがとくに分析上注目す
るのは、店頭における店員と客との直接的なやり取りである。これは、サービス研究においてはサービスエ
ンカウンターと呼ばれ、その相互行為としての特質に注目が集められてきた。しかしながら、やり取りの相
互行為としての性質を調べるための具体的な手法は、いまだこの分野では確立されていない。そこで本発表
では、サービスエンカウターのビデオデータの具体的な分析を行い、サービスエンカウターの分析の枠
組みとして会話分析が有用であることを示す。その際に、サービス場面に存在する様々なモノ（メニュー表、
カウンターetc.）の相互行為の中でののはたらきにも注目する。

平本毅・山内裕（in press）「どんな店か、どんな客かー鮎屋の注文場面の会話分析」水川善文・五十嵐素子・秋谷直矩編『ワ
ークプレイス・スタディーズ：働くことのエスノメソドロジー』ハーベスト社。

平本毅・山内裕・北野清晃（in press）「言語と情報への会話分析によるアプローチ：ハンバーガー店の調査から」『日本情報経
営学会誌』35(1)。

法のビデオ研究の価値と実際

北村 隆憲（東海大学）

映像データを使って経験的研究をしようとする際、法の現場はデータ収集に関して、著しい困難を突きつ
けてくる。被告人に対する取り調べ場面、刑事裁判や民事裁判の公判廷の様子、裁判員裁判の評議場面、弁
護士と依頼人との法律相談場面、裁判所での調停場面などの法的場面を、「真性」の映像データを使って解明
したいと思っても、通常、撮影の許可がおりることはない。他方で、法の世界には、「真実」追求のための映
像への大きな欲望と信頼も存在する。被疑者が写っているセキュリティカメラからの画像が捜査上の重要な
資料や公判での決定的な証拠として利用される。最近では「取り調べの可視化」、つまり警察・検察の被疑者
に対する取り調べ過程のビデオ撮影が手続きの適切性を証拠立てるものとして導入が議論されてきた。この
導入に対する周知の大きな抵抗が、映像によって「真実」が見出されることにまつわる様々な問題や利害に
由来するとすれば、そこには映像は「真実」の写しであり、さらにはその真実が映像を見ることによって「自
然に」「自明に」理解可能であるという想定が秘められているようにも思われる。

しかし、無論、「見ること」は自明な活動ではない。映像を自然に理解できることは、ある「見方」にそ
って初めて達成されうることである。従って私達は、映像に写された人々が何を行っているのかを検討する
と同時に、私達がそれをどのように見ているのかをも再帰的に自問せざるをえないことになる。

本報告では、映像データならではの特徴が法的場面を研究するために大きな有用性を持つことを、裁判
員評議の裁判官による実演的行為、検察官反対尋問場面における裁判官の視線の動き、法律相談における弁
護士の視線と依頼人の動作、などの実例を挙げつつ示してみたい。

Goodwin, Charles (1994=2010) “Professional vision”. *American Anthropologist* 96(3), 606-633. [グッドウィン, チャー
ルズ (北村隆憲・北村弥生訳)]

「プロフェッショナル・ヴィジョンー専門職に宿るものの見方」 共立女子大学文芸学部紀要 第56集 35-80.]

北村隆憲 (2013) 「弁護士のアドバイスへの依頼者の拒否と抵抗」の可視化ー 臨床法学教育における「即時分析」から」 臨
床法学教育学会編『法曹養成と臨床教育』 No. 6, 167-171.

——— (2013) 「反対尋問のビデオ・エスノグラフィーー弾劾と防御の方略とコミュニケーション・トラブル」 『鹿児島大
学法学論集』 47 巻 2 号, 137-168.

ワークショップのリアルタイムドキュメンテーションムービーの価値と実際

岡部 大介（東京都市大学）・南部 美砂子（はこだて未来大学）・

原田 泰（はこだて未来大学）・松浦 李恵（東京都市大学大学院）

近年、社会構成主義的学習観に基づく、主体的な思考と協働のプロセスにおける意味生成を重視するワークショップが、地域、企業、学校などで数多く展開されている。「協働的な場面を通して他者と合意形成したり、他者とのかかわりを体験し直す場」（荻宿、2012）としてのワークショップにおいては、その過程のドキュメンテーション（記述と記録）もまた、極めて重要な位置を占める。ワークショップのドキュメンテーション手法として、本研究では、リアルタイム・ビデオ（RTV）を取り上げる。RTVとは「会場で起こっていることをリアルタイムに記録し、編集したものを通して、同じ時と場を共有している人たちに提供される映像」（曾和、2013）のことである。このRTVには、振り返りや新たな気づきという効果が期待されるが、同時に、活動を記録すること自体が活動の場そのものを活性化するという効果もあると言われる（上田、2009）。

はじめにRTVの持つ「映像」「即時性」「参加者への提供」などの諸特徴を取り上げ、記述と記録の活動におけるRTVの位置を示す。その上で、原田泰氏によって実施された「情報デザインのワークショップ」におけるRTVの現場から得られた知見を提示し、(1) カメラという人工物がワークショップに入ることの意味、(2) 今回、RTV制作者の活動そのものを対象として記録する私たちの試みがその場にもたらした影響について言及する。加えて、多くの人が手軽に映像を撮り編集できるようになった現代において、ビデオカメラで撮る／撮られることや、映像記録を共有することの価値、それらの実践がもたらす場の揺らぎについて議論したい。

荻宿俊文（2012）「まなびほぐしの現場としてのワークショップ」．荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎（編）．『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』．Pp. 69-116．東京大学出版会．

上田信行（2009）『プレイフル・シンキング』．宣伝会議．

曾和具之（2013）「リアルタイム・ドキュメンテーション」．上田信行・中原淳『プレイフル・ラーニング ワークショップの源流と学びの未来』Pp. 158-161．三省堂．

質的心理学研究・実践における「ま」の探求 ―保育・医療・企業・復興の現場から―

企画者・話題提供者：天野美和子（白梅学園大学）

小林恵子（㈱富士ゼロックス総合教育研究所）

駒崎 俊剛（東京医療保健大学）

宮本匠（京都大学）

本シンポジウムは、私たちの社会において、明確な因果関係や目的論的な時間の中におさまりきらない場・時間を「ま」と名づけ、その意義を議論するものである。企画者・登壇者は、2014年3月に開催された「マイフィールド博覧会」で出会ったメンバーで、それぞれ保育、医療、企業、復興の現場で同様の問題関心を持ちながら研究を進めている。当日は、それぞれのフィールドにおける「ま」がどのような意味を持っているのかについて報告した上で、質的心理学研究・実践における目的志向でない場や時間の意義を議論する。参加者も含め、異なるフィールドの実践に関わる研究者同士が、同様の研究関心でもって新しい共通言語を模索する場になることを希望する。各話題提供者からの内容は下記のとおりである。なお、より詳しい発表内容については、事前にウェブサイトで公開している（アドレス <http://polyphony.lms.ac/>）。当日は話題提供よりも、主に参加者とのディスカッションに時間を割り当てる予定なので、予め資料をご覧ください。幸いである。

□ 話題提供

園生活における「間」

天野美和子（白梅学園大学）

家庭や地域において異世代の子どもたちがふれ合う機会が減り、幼児とふれ合う経験が少ないまま大人になった親世代の子育て力の低下が問われるようになって久しい。このような社会的背景のもとで、異年齢の子どもとの交流を促進させる動きが高まった。その活動の一つとして、中学生や高校生が幼稚園や保育所を訪れて幼児とふれ合う体験活動がある。幼児の普段の園生活では同年齢の幼児らが活動を共にすることが多く、異年齢の場合であっても園内の年齢差の小さい幼児同士での交流となるため10歳以上も年齢差のある幼児と中高生との交流場面においては、普段の園生活では見られないふれ合いの様子を観察することができる。幼稚園や保育所の園生活には、保育者が設定した皆で一斉に何かに取り組む活動の場面や、自由に遊ぶ場面、食事、着替え等の基本的な生活に関わる場面があるが、筆者が観察する中で、幼児にとって活動の目的が必ずしも明確でない場所の移動途中や、待ち時間などのような場面と場面の「間」が多く存在していることが見てきた。そして、その「間」において幼児と中高生とのふれ合いが多く見られ、様々なふれ合い行動が生起していることがわかった。ほんの数日間の幼児と中高生のふれ合い体験期間における、園生活の「間」は、幼児と中学生にとって、どのような時間、空間であり、どのような意味があるのだろうか？

目的志向で利益追求型の企業組織での、項目化されない行動と『間』と時間

小林恵子（㈱富士ゼロックス総合教育研究所）

企業の目的は顧客の創造であると一般的に言われている。しかし実際の組織運営では、「何%の成長」という数値目標を戦略に組み込み、利潤の追求や売り上げ拡大そのものを目指していることがあまりに多い。目的を明確にし、それを達成するために測定可能な目標が設定され、管理の下で合理性を追求している環境を

生き残りの条件としている。つねに生産性の向上を目指し「無駄」のないプロセスを可視化することを重要とみなす。最も大切だとされる組織内のコミュニケーションまでも、情報共有を目的にしくみ化され IT 化される。コミュニケーションの改善は問題解決の手法の一つなのである。しかし、現場は非合理的な感情を行為の原動力とし、目的志向ではない会話に満ち溢れている。会議、打ち合わせ、顧客訪問、という可視化された公式行動の合間に交わされるちょっとした会話、何も目指していない場における、一見無駄とされているやりとりの中で、人々は学び合い動機づけられている。組織行動として項目化されない「間」で何が起きているのかを、異分野の視点から議論できればと考えている。

看護職における仕事と仕事との間にある休暇の取り方と専門職としての発達

駒崎 俊剛（東京医療保健大学）

看護師の適切な休暇取得は、職業の継続や患者への安全な医療提供との関連から本人・患者双方にとって利点がある。適切な休暇取得について調査をする中で、一方で、休暇制度の未整備により「休めない」看護師がおり、他方、制度は整備されているが、患者や同僚へ関心から関与を行い「休まない」看護師の存在が見えてきた。前者については、政府や業界団体により対策が進んでいる。しかし、後者については取り上げられることが少ない。そこで、休暇中のかれらの行動を調査票とインタビューにより収集し、本人が「看護活動と思う行為」へ焦点をあて分析した。その結果、他者への関心とそれに基づく他者への関与の仕方は、経験年数や職位によって変化することが見えてきた。この変化と専門職としての発達との関連について報告する。また、今回の調査では、対象を看護師としたが、現代の多くの職業では、人との関わりが大きな割合を占める。そこで、他の職種においても同様の関連性があるのか、議論を進めたい。

宮本匠（京都大学）

新潟県中越地震の災害復興についてのアクションリサーチを続ける中で見えてきたのは、アクションリサーチという枠組み自体を支える大前提である「現状をより良い状態へと変革すること」というかわり自体が、アクションリサーチが対象としている問題を一層深刻なものにすることがあるという矛盾であった。アクションリサーチの対象となる当事者が、当該の問題についての主体となる以前に、自らのことを否定的なまなざしでとらえる世界観を維持してきたとき、その対象に「より良い状態をめざす」ことを求めるかわりは、その自らを否定的なまなざしでとらえる世界観の強化につながり、問題の当事者となるということ自体を難しくさせてしまう。そこで、主体的な災害復興の取り組みにとって重要であったのは、目的志向でないボランティアの存在であった。災害による被害からの回復という大目的を持った災害復興という取り組みにおける、目的志向な支援のもつ課題を紹介しながら、他事例と問題意識を共有することが出来ればと思う。

※このシンポジウムでは、事前にウェブサイト (<http://polyphony.lms.ac/login/index.php>) へ詳しい資料を掲載します。利用の手順を以下に示します。

- (1) ログイン画面にて[ゲストとしてログインする]をクリックします。
- (2) パスワードには cN4G%8K を入力します。

また、ご意見・ご質問をいただける方は、掲示板機能を利用できるアカウントを作成します。
hilms-admin[アットマーク]thcu.ac.jp 宛に、お名前とご所属、メールアドレスを送信ください。

シンポジウム II 18 日（土）15：45～17:45

シンポジウム 1 大会実行委員会企画 820

フィールドワークとライフストーリー

登壇者：桜井 厚（立教大学）

岸 衛（龍谷大学非常勤）

司 会：本山方子（奈良女子大学）

□ 話題提供

ライフストーリー解釈におけるフィールドワークの意義

桜井厚（立教大学）

ライフストーリーの語りは、語り手と聞き手の相互行為による構築物である。私たちは、その言語的なコミュニケーションの相互行為と語られる内容の総体から人びとの生活世界を探究する。ところが、こうした見方は、ややもすると語り手と聞き手のインタビューという二者関係の完結した場をとおして調査協力者の生活世界の解釈がなされうるとする誤解を招きかねない。もちろん、先行研究や調査協力者についての予備知識はあらかじめ用意されていることはいままでの間でもないが、じつはそこには調査協力者の生きる世界についての丹念なフィールドワークが前提にされている。もちろん、ここでのフィールドというのは文字どおりの地域に止まらず組織や集団であり、さらに人びとそのものを指す。フィールドワークがライフストーリーの語りの解釈にどのような新たな知見をもたらしたのか、私たちの具体的な調査経験から検討することにした。

『聞くこと』にたどり着くまで

岸 衛（龍谷大学非常勤）

被差別部落の生徒が差別に直面した時、私のあらかじめ持っていた「知識」は何の力にもならなかった。ここから私なりの「聞くということ」が始まった。一人一人の「声」に耳を傾けてきた。そこから「もの」を考えていく。目の前の生徒が語り出すのを「待つ」。自然に語り出せるような、そういう自分になる。そのようにして、多くの「被差別の語り」を聞いてきた。「差別していないことを、慌てて言わなくても話せる自分」になった時、人と出会える。そういう瞬間がある。

しかしそうした「語り」を自分の枠組みで分類・整理してしまっていた。いつしか、それが学問だと勘違いしてしまっていた。「岸さん、『語り』をそんなことしてしまったら、ダメだよ」。まずフィールドに行って、そこで生の声を聞く。ここからライフストーリー・インタビューがはじまる。ここでは、語り手との関係・距離、語りの場、そして聞き手である「私」のあり方など、インタビューの場での様々な経験・出来事を紹介する。

質的研究と倫理—対話と葛藤としての研究倫理—

企画・司会：家島明彦（大阪大学）

話題提供者：池田光穂（大阪大学）

齊藤こずゑ（國學院大學）

安藤泰至（鳥取大学）

指定討論者：尾見康博（山梨大学）

□ 企画趣旨

本シンポジウムの目的は、「対話」と「葛藤」をキーワードにして「質的研究における倫理」について考える場を提供することである。

研究に携わる者にとって「研究倫理」は避けて通れないものである。しかし一方で、学問・研究の分野（領域）や研究にかかわる立場によって、倫理的配慮の幅、深さ、質、受け止め方、求められるレベル（方向性）などは大きく異なっているのが現状ではないだろうか。研究倫理について考える際、文脈（どのような研究分野における、誰にとっての倫理なのか）を抜きにして語ることは難しい。質的研究に関する研究領域は様々であり、本学会大会には多様なバックグラウンドを持つ研究者が集まっている。個人や集団を研究対象とする人文社会科学、その中でもとくに質的研究における倫理とは、どのようなものであり、どのような問題（葛藤）を孕むのであろうか。

『質的心理学フォーラム』第6号（2014年9月刊行予定）の特集テーマは「対話と葛藤としての研究倫理」であり、心理学、社会学、看護学、教育学、医療人類学、社会福祉学など、質的研究に関する様々な学問領域の研究者に特集論文を執筆していただいた。そこでこの考察は、多岐にわたっており、非常に鋭い視点を含んでいたが、倫理というデリケートでセンシティブなトピックで事例が出しにくく、かつ、紙面の都合もあり、企画者としては、どうしても十分に議論し尽くすことはできなかった感がある。

そこで本シンポジウムでは、パネル・ディスカッション方式で全体を第1部（前半）と第2部（後半）にわけ、話題提供と全体討論を行う。第1部（前半）では、特集論文の執筆者を中心に、質的研究に関する様々な学問領域の研究者に登壇いただき、それぞれの立場から研究倫理に関する話題提供をしていただく。第2部（後半）では、パネル・ディスカッションとフロアの参加者も含めた全体討論を行う。

「研究不正」や「生命倫理」の基本を知り、様々な学問分野における研究倫理のあり方について学び、質的研究と倫理に関して参加者全員で議論する有意義な場としたい。

※参加者には、事前に『質的心理学フォーラム』第6号（2014年9月刊行予定）の特集テーマ「対話と葛藤としての研究倫理」における論文と討論に目を通しておくことをお勧めする。もちろん、シンポジウムの冒頭でダイジェスト的に全体および各論文の概要は説明する。なお、『質的心理学フォーラム』第6号は、当日受付でも販売予定（最新号である第6号は2000円、第1号から第5号までのバックナンバーは特価500円で販売予定）である。ただし、要事前申込（詳細はメルマガ9月号を参照）。

＊論点（考えてみたいトピック）

- 研究倫理は、ルールなのか、ガイドラインなのか、はたまたマニュアルか？
- 領域による違いとは？（対象者の違い？方法論の違い？理論・認識論の違い？）
- 誰にとっての倫理？（対象者を守る？研究者を守る？機関を守る？学問領域を守る？）
- 明確な線引きが「あるもの」と「ないもの」（連続的＝量的，非連続的な境界線＝質的）
- アプローチ・モデル（理想を目指す形）か，アボイダンス・モデル（最悪を避ける形）か？
- 倫理的配慮は，外発的なものか，内発的なものか？（倫理と善や徳との関連）
- 倫理的配慮は，TPOに合わせて変化するものか？
- 研究プロセスのどの段階における倫理か？（計画，アプローチ，調査，論文化，公表）
- 倫理の教育は可能か？（経験・環境を通してしか身につかないもの？）
- 研究倫理審査委員会の意義とは？
- 理想と現実（実態）
- 対話と葛藤
- 性善説と性悪説
- etc...

＊参照

『質的心理学フォーラム』第6号 特集テーマ「対話と葛藤としての研究倫理」 目次

企画趣旨 河原智江・檜田美雄・家島明彦

基幹論文

研究者と研究対象者との関係から研究倫理を考える 河原智江

論文

フィールドワーカーが倫理審査に出会うとき——医療現場における質的研究の「困難」 田代志門

研究不正とどのように向き合うか？——実践的審問 池田光穂

子どものフィールド参与観察における倫理——子どもとの共同の模索 斉藤こずゑ

社会福祉領域における研究倫理審査委員会の必要性 土屋典子

研究倫理に関する〈合意形成〉の相互行為分析——福島県民健康管理調査の事例研究 檜田美雄

討論

特集から見えてきた対話と葛藤 河原智江

研究と研究倫理は，対話と葛藤の果てに，新しい研究領域を産み出し得るか 檜田美雄

＊『質的心理学フォーラム』を当日に購入する方法

日本質的心理学会メールマガジン No.119（2014/9/20 発行）のメール本文に『質的心理学フォーラム』バックナンバー購入予約申込フォームの URL が記載されています。完全予約販売なので，購入を希望する方は，必ず申込フォームから購入予約をお願いします。申込期限は2014年10月10日（金）24時，支払いは現金のみです。お問い合わせ先は forum@jaqp.jp（『質的心理学フォーラム』編集委員会）。

コミュニティを編み直す：研究／研究者の意義をめぐって

企画：青山征彦（駿河台大学）・香川秀太（青山学院大学）
・岡部大介（東京都市大学）

話題提供：中村雅子（東京都市大学）
ソーヤーりえこ（早稲田大学理工学術院（非常勤））
石田喜美（常磐大学）

指定討論：南部美砂子（はこだて未来大学）
文野洋（文京学院大学）

□ 企画趣旨

心理学においても、研究者が、なんらかのコミュニティについて研究したり、コミュニティの運営に携わりながら研究したりすることが、近年増えてきている。こうした方向性は、研究者のあり方や、心理学のあり方にも影響せざるをえない。例えば、実験室研究のように、あたかも自分とは無関係な対象について、客観的、科学的に研究する（あたかもアリを観察するように）というわけにはいかないだろう。コミュニティに対して研究者が継続的に関わろうとすると、コミュニティは研究者に対して何らかの役割を期待する。利害関係が生じて、反目したりすることもあるだろう。これらは、従来の実験研究、調査研究が前提としてきたような研究者のあり方では起こりえないようなことである。

そこで、本シンポジウムでは、研究者がコミュニティに関わることが、コミュニティにとって、そして研究者自身にとって、どのような意味を持つのかを考えてみたい。研究者は、どのようにコミュニティに参加していくのか、そこでの立ち位置はどのようなものなのか、そしてコミュニティの変革に研究者としてどのように関わっていけばよいのか、コミュニティに対して研究／研究者は何をなし得るのか。さまざまなコミュニティと関わってきた研究者の報告をもとに考えてみたい。

□ 話題提供

変化する研究者の関与をどう分析に取り込むか

—市民デジタルアーカイブ活動への参与の事例から—

中村雅子（東京都市大学）

市民が主体的に自らの地域の歴史的な情報を掘り起こして収集し、ウェブなどのデジタルメディアを活用しながら情報発信したり、現在を記録して後世に残したりする活動を、市民デジタルアーカイブ活動と呼ぶ。

インターネットやデジタル情報機器の普及を背景に、全国で広がり、1990年代から続くものもある。報告者の大学のキャンパスが位置する港北ニュータウン（横浜市）でも、このような活動が活発に行われている。

セルトー（1980=1987）は、都市について語るときに、均質的なあり方を上から押し付けるものとしての計画的な「都市」に対して、人びとがどのようにそれを押し返し、生き返す＝「実践」するかを重視した。

それにならえば、このようなアーカイブ活動は、例えば「新しく何もない街」と言われるニュータウン

を、住民自らがユニークな街として語り直す＝「再領有化する」実践として捉えられるのではないだろうか。

報告者は地元地域で、街の歴史や地域情報に関わる人々の情報交換の場作り支援等でアーカイブ活動と関わりを持っている。市民の活動は不定形で刻々と形を変えていくことも少なくないが、研究者の関わり方も時間経過とともに変化する。研究的介入が活動自体を維持する場合もある。研究者がオブザーバから幹事的な役割へと移行した経過を事例として、実践での研究者の立ち位置や役割、およびその変化を分析にどう取り込むかを考える材料としたい。

地域におけるコミュニティの作り直しにおけるエージェンシーの生成過程

ソーヤー りえこ（早稲田大学理工学術院（非常勤））

ここでは、ある地域で地域通貨を用いたり、新たに農業的な活動を多様に展開している事例を見る中で、どのように新たなコミュニティが形成され、それに伴ってどのように新しいエージェンシーや活動が生み出されているか分析する。具体的には、長野県上田市の市民グループ「蚕都くらぶ・ま〜ゆ」の歴史とその活動を見ていく。ま〜ゆは地域通貨での様々なモノ・コト交換を目指し形成された。その後、ま〜ゆのコミュニティをベースにして、味噌、米づくりなどの農業的活動や古民家を改造して新たなコミュニティの拠点を作ろうとする活動など多様な活動を展開している。ま〜ゆは、当初上田市に移住してきた数名により開始されたが上田出身者が中心メンバーに加わり、さらに多くの地域の人々が参加することで、地域通貨を超え、様々な新しい活動を可能にする社会－技術的な布置が作られていった。新たに開始された農業的活動やその他の活動は、地域通貨によって作られた新たなコミュニティを通して可能になった。つまり、地域通貨によって作られた新たな社会－技術的アレンジメントが、新しいエージェンシーをつくりだし、新たな活動を実現していった。結果として、多くの他地域で持続不能となった地域通貨活動が、ま〜ゆでは現在も継続されている。

こうした事例は、地域における新たなコミュニティ形成は、新たなエージェンシーや活動を形成することに繋がり、逆に、新たなエージェンシーや活動が形成されることでそのコミュニティは持続可能になっていることを示している。研究者の役割・貢献は、地域のコミュニティにどのような社会－技術的アレンジメントを加えて行けるかだと言えるであろう。

アクティブ・アーカイヴにおける研究者の立ち位置

—水戸芸術館現代美術センター「高校生ウィーク アーカイ部」の実践から—

石田喜美（常磐大学）

現在日本全国で展開されているアートプロジェクトにおいて、評価や記録の不在が問題視されている（吉澤,2011）。アートによる表現がコミュニティに対して役割を果たす一方で、そのさらなる展開のために、評価や記録が必要とされている。そこで大きな役割を果たすのは、言語による表現であり、研究的な表現である。そして現在これら評価や記録といった活動に、様々なかたちで研究者がかかわり始めている。

発表者は、2006 年より水戸芸術館現代美術センターの教育プログラム「高校生ウィーク」に研究者として関わりはじめた。2011 年 3 月から、そこで得た知見を現場へとフィードバックし、さらなる展開のために活用してもらうためのひとつの試みとして、高校生ウィークの記録・記憶を集めるプロジェクト「高校生ウィーク アーカイ部」を始動した。「アーカイ部」には、発表者および水戸芸術館のスタッフ、ウェブデザイナー、「高校生ウィーク」OG など様々な立場の人々が参加し、記録・記憶を集める手法からその公開・発信の仕方までを話し合いによって決定している。ソーシャル・アーカイヴの考え方にに基づきながらも、様々な関係者らとともに「高校生ウィーク」の意味を積極的に構築すること（アクティブ・アーカイヴ）が、本

プロジェクトのねらいである。本発表では、あるインタビュー記事の制作過程における「アーカイ部」メンバーによる議論を事例とし、その中での研究者の立ち位置および役割について分析した結果を報告する。

〈現場〉を読みとく質的研究の方法論の“勘所”

企画：鮫島輝美（京都光華女子大学）

西川みゆき（京都光華女子大学）

司会：鮫島輝美（京都光華女子大学）

話題提供者：波平恵美子（お茶の水女子大学名誉教授・非会員）

小田博志（北海道大学大学院・非会員）

指定討論者：竹内みちる（高齢者住宅研究所）

宮本匠（京都大学防災研究所）

波平は、その著書『質的研究 Step by Step—すぐれた論文作成をめざして（波平・道信，2005，pp2-3）』の中で、質的研究の特徴として、①多様な研究方法の総体としての質的研究 ②研究対象が方法論を決定する ③研究対象の人々の視点に立つ ④文脈を重視する、の4点を挙げている。人間の生き方は多様であるため、人間を対象とした、人間の生き方の具体性と多様性を明らかにするための研究方法は、多様にならざるを得ない。また、質的研究の目的は、研究対象を明らかにすることであり、既存の理論や方法論の有効性を確認したり検証したりすることを目的とはしていない。そのため、研究対象の特性に応じて研究方法は選択されるべきである。また、質的研究においては何よりもまず、対象となる人々が自らを取り巻く世界を、また、自分たちの生活をどのように見ているかに注目し、できるだけ、研究対象となる事象を社会的、文化的、歴史的な文脈においてとらえ、理解しようとするのが大切、とされている。

また、別の著書『質的研究の方法—いのちの“現場”を読みとく（波平・小田，2006，pp68-73）』の中で、「質的研究は手仕事、まずは素材と向き合う」べき、と述べている。質的研究において、どうしていいかわからなくなったときは、「とにかく（文献やデータ）を読む」と述べている。大切なのは、「データの『声』を聞く」ことであり、「テーマはいつも『聞こえて』くる」ものである、としている。

以上の特徴は、質的研究の醍醐味そのものであると同時に、研究方法を理解し、実施する上では、困難をともなう原因ともなっている。

□ 企画趣旨

近年、質的研究への関心が高まっている。企画者が専攻している看護学においても、その潮流は見られ、「看護研究・質的研究」というタイトルの著書の出版が相次いでいる。看護系の雑誌などでもよく取り上げられ、質的研究のノウハウ本といったものも多い。最近、出版されたものの一つに『質的研究のピットフォール：陥らないために/抜け出るために（萱間，2013）』がある。このようなタイトルの著書が出版されるということは、質的研究が一般的に行われるようになったということであり、同時に質的研究では、「ピットフォール」と表現されているように、失敗しやすい点がいくつも潜んでいることを意味している。

また、方法論が目的にしたがって明確な自然科学・量的研究とデータに合わせ方法論が異なる人間科学・質的研究の差異を十分理解した上で、研究がなされているとは言い難い。さらに、よく聞かれるのは、「質的研究は学会投稿が通りにくい」「accept されるのに苦労した」といった方法論としての困難があると考えて

いる。

以上から、質的研究を行うにあたって、書籍には記述されていない、又は、記述そのものが難しいような“勘所”があるように感じている。今回、『質的研究の方法—いのちの“現場”を読みとく（2006）』の著者である波平氏と小田氏に質的研究の方法論について再度「対談」いただく機会を得た。シンポジウムでは、参加者が、質的研究の先達が体験の中から紡ぎだした方法論の「息づかい」のようなものを感じられる機会としたい。

小田は、その著書『質的研究の方法—いのちの“現場”を読みとく（波平・小田，2006）』の中で、「本書の特徴は、ベテラン研究者の人生経験から質的研究の方法を学ぶ点にある」としている。「方法論は経験に宿る」ものであり、教科書的な抽象的なまとめではなく、具体的なエピソードの方が研究を進めるためのコツをつかむことができる、また、研究の方法論は、研究者の人生の経験のなかに埋め込まれており、経験に基づく智恵と、現場に根ざした方法論を読み取ることが重要であるとしている。

□ 企画概要

話題提供者から、対話形式で、〈現場〉を読みとく質的研究を進めていく中で、ぶつかりやすい問題や、誤解されやすい問題・混同されやすい問題など、テキストだけでは伝えることが難しい、テキストとテキストの間には収まりきらなかったような、「行間」について語っていただく。

そのあと、指定等論者からも問題提起していただく。それをふまえ、フロアから、感想・質問、その他、普段なかなか尋ねることが難しいような質的研究の方法論における悩みなど、ご呈示していただき、次へのStepへのヒントを得られるような機会となれば、幸いである。参加者からの活発な参加・意見を期待している。

□ シンポジストご紹介

波平恵美子氏

1942年福岡県生まれ。佐賀大学助教授、九州芸術工科大学(現・九州大学芸術工学部)教授、お茶の水女子大学教授を歴任。現在、お茶の水女子大学名誉教授。専門は、文化人類学、医療人類学、宗教人類学、ジェンダー論。

九州大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。テキサス大学大学院で博士号を取得。

著書に『病気と治療の文化人類学』（海鳴社、1984年）、『病むことの文化』（海鳴社、1990年）、

小田博志氏

現在、北海道大学大学院文学研究科准教授。専門は人類学、平和研究、質的研究方法論。

大阪大学大学院人間科学研究科後期課程単位取得退学。ハイデルベルク大学医学部で博士号取得(Dr.sc.hum)。

著書に『エスノグラフィー入門・〈現場〉を質的研究する』（春秋社、2010年）、『質的研究の方法—いのちの“現場”を読みとく』（波平恵美子と共著、春秋社、2010年）など。

訳書に『がんを超えて生きる』（R・ヴェレス著、共訳、人文書院、1999年）、『新版質的研究入門』（U・フリック著、監訳、春秋社、2011年）がある。

個人ウェブサイト「小田博志研究室」：<http://www13.ocn.ne.jp/~hoda/>

特設ウェブページ「エスノグラフィー入門・プラス」：

<http://www13.ocn.ne.jp/~hoda/ethnography.html>

医療分野の研究におけるナラティブ分析

企画・司会：宮坂 道夫（新潟大学）

話題提供者：宮坂 道夫（新潟大学）

田口 めぐみ（新潟大学）

菊永 淳（新潟大学）

酒井 菜津子（北里大学東病院）

大久保 功子（東京医科歯科大学）

□ 企画趣旨

看護研究を中心とする医療分野の質的研究では、ナラティブ分析に大きな関心が集まっている。しかし、ナラティブ分析はきわめて多様な方法の集合体であり、このことが〈標準化〉を指向する医療分野での一つの障壁となっている。私たちは、リースマンによる、(1)テーマ分析、(2)構造分析、(3)会話／パフォーマンス分析、(4)ビジュアル分析という、ナラティブ分析の系統分類に着目する。本企画の目的は、リースマンの系統分類を参照しながら、医療分野における固有な質的研究法として、ナラティブ分析を位置づけていく際の課題を模索することである。そのために、まず医療分野でのナラティブ分析の現状を概観し、次にリースマンによる分類を批判的に検討する。その上で、医療分野でのナラティブ分析の研究例を横断的に比較検討することを通して、今後の医療分野でのナラティブ分析を展望する。

□ 各登壇者の報告タイトル／各登壇者の報告趣旨

リースマンによるナラティブ分析の類型化

宮坂道夫

「ナラティブ分析」は、きわめて多岐にわたる雑多な方法論の「束」のようなものとして存在している。ところが、リースマンはそれを、(1)テーマ分析、(2)構造分析、(3)会話／パフォーマンス分析、(4)ビジュアル分析に系統分類してみせた。本人が述べているように、これ以外にも分類の方法はあるのだろうが、この分類法は簡潔明瞭であり、なおかつナラティブという概念のもつ幅広さや多様性を取り込んだものになっている。すべての系統に共通するのは、物語的転回すなわち言語学的・演劇論的な視点の導入と、文脈依存性および協働構築性とも言うべきものへの配慮であり、より具体的な操作上の態度として、個々のケースの全体性を保持したまま扱うこと（これがグラウンデッド・セオリーとの違いだと強調される）である。一方で、「ナラティブ」概念の定義や、分析の「単位」もしくは「標的」、扱われる資料のジャンルなどは、系統ごと・研究ごとに異なり、多様なままである。こうして系統分類されたナラティブ分析を概観すると、医療分野における分析ツールとしての有用性がより明確なものとなってくるように思える。医療では、〈標準化〉の他に〈個別化〉という正反対の価値も重視されてきているはずであり、ナラティブ分析がその方向で貢献しうるだろうし、もっと言えば〈標準化〉という方向に対してさえも有益な知見を提供しうるように思える。

構造分析とテーマ分析による看護師の規範意識の研究

ー看護師が経験したジレンマについてのナラティブー

田口めぐみ

看護師が看護チームに対して経験するジレンマとその時の態度・行動を明らかにすることを目的に、臨床経験3年目から10年目の看護師10名にインタビュー調査を行った。分析はリースマンのナラティブ分析か

らテーマ分析と構造分析を用いた。テーマ分析は語りの内容に焦点を当てテーマ的なまとまりを持つ語りの部分を分析単位として扱う方法であり、構造分析は語りの形式に着目し、その語られ方を一定のパターンに則って分類する方法である。看護師が語ったストーリーから 31 のエピソードを抜粋した。テーマ分析の結果 (A) 看護チームの習慣に対するもの (B) 看護経験の多少に基づくもの (C) 看護師－医師の関係に基づくものの、3 つのテーマが抽出された。構造分析の結果から (1) ジレンマに対応しなかったもの (19 例) (2) ジレンマに対応したが効果が得られなかったもの (10 例) (3) ジレンマに対応し効果が得られたものの (2 例) の、3 つに分類できた。ナラティブ分析から 2 つの方法を用いて看護師の語りを分析した結果、ジレンマの内容とその対応が明らかになり、看護師の看護チームにおけるジレンマの構造が示唆された。

『キャラクター分析』による看護師の自己認識の研究

－看護師が語る『根治治療が困難になったがん患者への告知』の分析から－

菊永淳

ナラティブ分析での重要な視点は、同じ現象を経験した当事者においても、人によって解釈や意味合いが異なることである。宮坂は、当事者間での現象への認識が異なる要因として、「心理的な深さ」「時間的な経緯」「関係性」の 3 つを挙げている。これらの要素を分析することは、個々のナラティブの中で語られる現象ごとの解釈や意味合いを、多角的視点から、より深みを持って理解することにつながると考え、「キャラクター分析」という新しい分析法を考案して用いた。本研究では、根治治療が困難になったがん患者への告知をめぐる看護師の語りの中に、どのような人物が登場するか、それぞれの人物がどのように性格付け（キャラクター化）されているか、人物同士の関係とその優位性がどのように描かれているかを図式化し、その時間経過が理解できるように、ストーリーラインを作成して明らかにした。それにより、看護師の自己認識の視点から、「根治治療が困難になったがん患者への告知」という複雑なテーマを、色濃く描き出せたのではないだろうか。また、テーマ分析にキャラクター分析を組み合わせることで、テーマ分析から抽出された概念により深みを持たせられるのではないかと感じている。

テキストと行為の主体性に着目し、断酒会のダイナミズムについての研究

酒井菜津子／宮坂道夫

アルコール依存症者のセルフヘルプ・グループである断酒会では、「言いつばなし、聞きつばなし」という規則を設けて個人の語りの自由を保障しながら、〈断酒の継続〉という規範を維持するという、一見矛盾した語り合いが行われている。本研究では、〈集団〉での語り合いが、どのような仕組みで、参加する〈個人〉を断酒継続のための規範に従わせているのかを明らかにすることを目的として参加観察を行い、変則的場面に焦点をあて、規範から逸脱した語りと、それに対する他の参加者の反応を分析した。その結果、(1) 必ずしも「断酒新生指針」などに明文化されていない、判断の難しい問題が語り合いの中で具体的に提示され、他の参加者から評価を受ける仕組みが存在する、(2) 「言いつばなし、聞きつばなし」という規則に加えて、〈主体の置換〉、〈名挙げの省略〉、〈脱焦点化〉、〈カテゴリーの拡大〉といった巧妙な言語学的方法が用いられることで、個々の題材に適した緩和が行われ、直接性や批判性が弱められていた。以上から、日本の断酒会には、AA をモデルとして構築されてきた、〈自己物語の再構築〉のためのストーリーモデル提供とは異なる断酒継続の仕組みが存在することが示唆された。

解釈学的現象学とナラティブ分析は同じなのか、違うのか。区別することに意味があるのだろうか。「解釈学的現象学の研究方法をとる研究者はそれとなくナラティブ分析をしてきた。」と Riessman はいう。どうして、このようにどうでもいいような問いを立ててみたくなったかという、私自身が、解釈学的現象学で研究をしたつもりだったのだが、Cresswell の分類（現象学については非常に疑問がある）によると、ナラティブアプローチに分類されうることを見出したからである。現象学と一口にくくられている伝統的研究方法と、現象学的アプローチをまず区別し、現象学的アプローチに関して、フッサリアンとハイデッガーリアンの視点と違いを紐解きながら、なぜそのような研究にならざるを得ず、それがなぜナラティブ分析に分類されることもありうるのかについて、知の形式、真実とは何か、どうそれを知り得るのか、それは正しいのかなどの視点を手掛かりに、自分の足跡を題材に語る努力をしてみようと思う。

被災地の復興の経験とは何か

企画・司会：伊藤哲司（茨城大学人文学部）

・川野健治（（独）国立精神・神経医療研究センター）

話題提供：福井孝子（茨城大学大学院教育学研究科）

川野健治（（独）国立精神・神経医療研究センター）

伊藤哲司（茨城大学人文学部）

□ 企画趣旨

2011年3月11日に発生し、後に東日本大震災と呼ばれた災害は、2014年7月10日現在でなお、約24万7千人の避難者を数える甚大なものである。しかし、この大震災で被災をした人々は、あのとき以来ずっと変化なく「被災者」であり続けたわけではない。物理的には瓦礫を片付け、建物を修復し、新しい街づくりを模索する一方で、個々には生業や住まい、対人関係のあり方を変えながら、「日常生活」を探り続けている。そのなかでは失われたものも多かれど、あらたに生じた「縁」など得られたものも少なくないだろう。本シンポジウムでは、復興の過程と並行する個人の経験に焦点をあて、支援、居住、職業生活といった活動に、回復やレジリエンスの実態を見出そうとする議論を展開する。そのことを通して、未曾有の災害とその後がもたらした「被災地の復興の経験」とは何かを、トラウマやPTSDといった観点とは少し違うところから明らかにしたい。なお今回は指定討論者を設けない。参加者全員でのディスカッションを重視する。

□ 各登壇者の報告趣旨

被災後も働き続ける宮城県石巻市の中学校教員の語り

福井孝子（茨城大学大学院教育学研究科）

「艱難汝を玉にす」ということわざに似た考え方の1つが心的外傷後成長（Posttraumatic Growth、以下PTG）である。これは、災害、事故、あるいは病気など悲惨な出来事に見舞われた人が心に傷を負い苦悩しながらも、遭遇したその出来事を転機に成長していける可能性があることを謳っている。つまり、困難や苦悩に襲われた時に、人が「何をできない」のではなく、「何をできるか」に視点を置いているとも言える。

東日本大震災は、大地震と大津波が、そしてほぼ同時に原発事故が東日本を襲い、災害の規模は拡張し、人々を恐怖へと陥れた。今回の震災により被害を受けた当事者の中にはトラウマによるPTSDを負い、大切なものを失ったことによる喪失感や無力感など、さまざまな感情が積み重なり、それらが結果的に日常生活を営む上でさらなるストレスになっている人もいる。

しかし、その一方で、このような逆境体験があったからこそ、これまでの自分自身の生き方、考え方、あるいは価値観などを考え直し、自己に変化をもたらすという人もいるかもしれない。本研究は、震災による被災状況やトラウマ体験に焦点をあてるのではなく、冒頭に記したように、震災という過酷な体験がPTGへと変化する可能性について探索的に考察することを目的とする。

本調査では、自らも被災しながら地元での教育活動を続けている宮城県石巻市に住む中学校教員1名に非構造化インタビューを行い、震災体験とその後の心境の変化を語ってもらった。震災後、生き残った子どもたちとの学校での日々、そして、その一方で幼なじみを津波で亡くした彼女自身の深い悲しみとの対峙など、否認、怒り、恐怖など苦悩のなかでもがきながら、震災を自分の人生に「意識の変革」と意味付けし、確実に人生観や生き方が変化した。また、彼女の「震災体験を経たゆえの自分というアイデンティティ」をと

して、PPTG (Post-Posttraumatic Growth) と位置づけられる PTG の後の段階の有り様を考えてみたい。

山古志と大槌の生活支援相談員の出会い「しえん者こん」

川野健治 ((独) 国立精神・神経医療研究センター)

東日本大震災の被災地域への支援として、新潟県中越地震被災地で活動した支援者を岩手県釜石・大槌町地域に招いて現支援者との対話の機会を提供し、被災地の生活支援について自由に意見交換する機会として計画した「しえん者こん」について紹介したい。

このプログラムは、2012 年 12 月 5 日の午後に、大槌町役場の仮庁舎の一室で開催された。新潟からは、中越地震以降、新潟県にて生活支援相談員事業に関連した、LSA (生活支援相談員) や県行政職員、社会福祉協議会職員、研究者の 4 名、岩手県大槌町からは、LSA のほか、地域支援相談員、町社会福祉協議会、大槌町の保健師、被災者支援室の職員など、併せて 40 数名が参加した。プログラムは大きく 3 つの部分で構成されていた。1) 新潟県旧山古志村の取り組みの紹介、2) 4 つの班にわかれての小集団討議、コーヒーズ・ブレイクを挟んで、班員を入れ替えてもう一度小集団討議を行った。各班に司会と記録役をつくり、討議の内容は終了後に全体で共有した。3) 最後に、対話の内容を基にした、かるたづくりにとりくんだ。

LSA の日々の活動の中には、今後起こりうる被災の現場に向けて「受け渡し、引き継ぐべき経験」が含まれている可能性があるが、それは日常的に意識されるものではない。東日本大震災の支援者にとって、かつて同じ LSA という名称の下の活動に従事し、おそらく具体的には異なる経験をもつ新潟中越地震時の LSA との対話は、協調とズレを含み得る「構造的ディスコミュニケーション」(山本・高木、2011) であり、両者の生活支援についての相互説明・理解のプロセスは、より創発的で可能性に富むと期待される。その記録を作成することは、異なる時間と空間の被災地間でのインターローカリティ (矢守、2009) を探索する試みであると考えられた。

おばちゃんたちの交流「サンガ岩手」を取材して

伊藤哲司 (茨城大学人文学部)

2004 年 12 月 26 日に発生したスマトラ沖大地震によるインド洋大津波、その被災地となったひとつであるプーケットの調査を通して、思いがけず「明るい被災地」に出会ったことが、問題意識の出発点にある。もちろん身内を亡くして悲痛な思いをしている人もいたが、コミュニティ内部の繋がりと日常性が保たれているなかで、ときにユーモアさえ感じさせる語りが聞かれ、それが人々の「生きる力」に繋がっていた。またそこでは犠牲者の死を運命として受け入れ、むしろ津波の記憶を「忘却」することで、日常生活への適応がはかられている様子が見られた。

東日本大震災では、自ら勤務先の学内のある 4 階の教室であの激震を体験した。津波の心配はまったくなかったが、隣接する福島県の前原事故の報も受けて、1 週間ほどは何か自分でも思うように動けない、普段とは違ったモードに入ってしまったかのように感じた。それをトラウマとか PTSD とかとは呼ばないと思うが、このような状況が自分にもあるうることがわかったことは、ひとつの貴重な経験であったとも言える。そうしたなかで私自身、家族をはじめ、周りの人との繋がりが、きわめて大事だと感じる事ができた。

東日本大震災から 3 年半近くがたった今年 (2014 年) 8 月、東北地方を巡る旅をした。川野健治さんに紹介してもらい、岩手県上閉伊郡大槌町での復興支援にあたっている NPO 法人「サンガ岩手」を訪問し、大槌町の現状を案内してもらいながら、代表で僧侶の吉田律子さんのお話を伺った。吉田さんの語りは震災を機にできた「縁」と、またご自身が地元の被災した人々と「共に生き抜く」ことに関するものであり、失われてしまったものの甚大さの中に、被災者と一緒に希望を見いだしていくものであった。当日は、吉田さん

へのインタビューのビデオ記録も一部お見せして、参加者のみなさんとそれを受けとめ、共に「復興の経験とは何か」を考えてみたい。

複線径路等至性モデル (TEM) の実践と展開

—『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ (TEA)』刊行に向けて—

企画：福田茉莉・安田裕子（立命館大学）

話題提供者：安田裕子（立命館大学）

豊田香（東京大学）

鈴木美枝子（静岡県立静岡北特別支援学校）

滑田明暢（滋賀大学）

能智正博（東京大学）

指定討論者：塩浦暲（新曜社）

□ 企画趣旨

本企画シンポジウムは、安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ(TEA)』(新曜社)の発刊に先駆け、TEA とは何か? という問いを基に、TEA の基礎知識の説明をはじめ本書の肝要とするところを紹介するものである。TEA は、複線径路等至性モデル (TEM)、発生の三層モデル (TLMG)、歴史構造化サンプリング (HSS) によって構成される、過程と発生を捉える質的研究の方法論である。その中心は TEM にあり、人生の径路や人間の発達の多様性と複線性を、時間を捨象することなくシステムとして捉え記述するための分析ツールである。本企画では、本書の執筆を分担くださった先生方をお招きし、TEA を用いた実践報告とその応用可能性、TEA を研究で用いることになった経緯、TEA の将来的展望などをご報告いただく。字面では語りつくせない研究者のリアルな〈声〉をお届けするとともに、質的研究の新たな手法としての TEA について、あらためて議論したい。

□『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ (TEA)』について

本書では、文化心理学を基盤として、これまで各学会や定期的な研究会での報告、個々の研究取り組みを基に発展してきた複線径路等至性アプローチ(TEA)について、これまでの議論や研究実践を紹介するだけでなく、本アプローチに関わってくださった国内外の研究者によるコメントや TEA の今後の発展可能性を示唆するような議論を盛り込み編纂されている。総勢 40 名以上の研究者が本書に寄稿くださっているということだけでも、TEA 研究の国内外へのインパクトや TEA の多種多様な広がりを感じていただくことができるだろう。本書の構成は、【TEA のいろはと阿吽(あうん)】、【研究実践とそこからの生成】、【海外編—海外での TEM 研究】、【TEA というメソドロジー】である。TEA の基本的な用語や考え方を解説はもとより、これまでの研究実践の紹介、TEA が促進的記号となり研究がアクティベートされた、あるいは研究に新たな発生を感じた研究者からの議論も含まれている。本報告では、これまで本アプローチに関わってくださった国内外の研究者からみた TEA に関する議論や、質的な研究アプローチとしての TEA に、今後どのような発展可能性が見込まれるのか、それぞれの研究領域からのその応用可能性について述べていただく。

□ 話題提供

TEA とは何か？—『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ(TEA)』の紹介

安田裕子（立命館大学）

本報告では、話題提供いただく前段として、『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ(TEA)』に関する本書の紹介、および TEA の基本的用語や基礎知識について概説する。TEA は、複線径路等至性モデル(TEM)、発生の三層モデル (TLMG)、歴史構造化サンプリング (HSS) によって構成される過程と発生を捉える質的研究の方法論であり、これまで分析ツールとしての TEM を中心に発展してきた。TEA とは何か？という視点に立ち返り、あらためて TEA について概観する。

専門職大学院ビジネススクールの学びにより変容する経営実践

—職業的アイデンティティの変容を可視化する試み

豊田香（東京大学）

本報告では、経営実践の研究における TEA の適用とその強みについて紹介する。現在、日本の企業で働く人々には、自らキャリアを形成するキャリア自律が求められる。その能力開発行動の事例として、専門職大学院ビジネススクールに着目し、インタビュー調査から、そこでの学びがもたらす、経営実践と職業的アイデンティティの変容のプロセスを、学習者に寄り添い分析した。TEA を用いて、経営実践という行動レベルと、アイデンティティという心的レベルの変容を、同じ時間軸で可視化する試みを報告する。

障がい児への理解と教育

—特別支援学校教師の『自閉症児の理解を深める視点』の生成過程—

鈴木美枝子（静岡県立静岡北特別支援学校）

本報告では、TEA に研究をプロモート&アクティベートされた実践のひとつとして、特別支援学校で障がい児の指導に携わる熟練教師を対象としたインタビュー調査の結果を報告する。障がい児教育に関する教育理念や制度改革などの社会情勢や行政のあり方に影響を受ける中で、ある熟練教師が、教師生活で児童とどのようなかかわりを持ってきたのか、教師経験を重ねる上でどのような変容が見られたのか、そのプロセスを明らかにし、「自閉症児の理解の視点」の生成過程を検討する。

ナラティブ研究と TEM—その発想はどこで交差し、どのように響き合うことになるのか

能智正博（東京大学）

本報告では、TEM の考え方や方法がナラティブ研究とどこで交差し、どのように響き合いながらお互いを発展させる刺激となりうるのか、をナラティブ研究の視点から議論する。不均質で不可逆的な時間とともにある人間を描き出すという TEM の目論見は、物語的に構築された個人の体験世界を内側から描き出そうとするナラティブ研究とも親和性が高い。しかし、語りに基づく人生径路を記述する試みには、人生径路を語る個人が、各々の人生を語ると同時に、その語りの現場で生じる聞き手と語り手との間の対話性や文化的条件の影響を受けていることにも目を向ける必要がある。

TEA 研究の海外動向—TEM/TEA on the globe

滑田明暢（滋賀大学）

『ワードマップ 複線径路等至性アプローチ(TEA)』には、ヴァルシナーやハーマンスをはじめとする TEA に縁のある海外の研究者にも寄稿いただいている。したがって、本報告では、本書に寄せられた各研究者の

コメントを紹介するとともに、海外での TEA 研究の発展や海外の研究者からみた TEA 研究について概説する。各研究者の議論に共通する点に着目し、TEA 研究をより深く理解する機会としたい。

**＜私＞をめぐる謎を斜めから見る
—「カプグラ症例」による脱構築の試み—**

企画者：小島康次（北海学園大学）

司会：森岡正芳（神戸大学大学院）

話題提供者：小島康次（北海学園大学）

麻生 武（奈良女子大学）

渡辺恒夫（東邦大学）

指定討論者：森岡正芳（神戸大学大学院）

□ 企画趣旨

「自己」をめぐる問題は、他者との社会的関係の一つの結び目として見る、あるいは語られる、いわゆる関係論的アプローチによるものが心理学の分野では主流だったように思われる。他方、「自我」あるいは「自我意識」を、＜私＞をテーマとする、やや哲学的テストをともなった「自己」研究も、近年、一つの流れを形成しつつあるように見える。これらの大きく異なるアプローチを俯瞰してみると、必ずしも相反する見方を反映しているわけではなく、共通の問題意識をそれぞれの方法によって正面から捉えようとした結果、異なる風景を描き出しているようにも思われる。このシンポジウムでは、「カプグラ症候群」という＜私＞をめぐる臨床例を題材として、両アプローチを共に視野に入れる「斜めから見る」見方を試みる。現象学、記号論、発達論等の異なる視角からこの問題を掘り下げることにより、新たな「自己」像を描き出すヒントが得られるのではないかと期待される。

□ 報告趣旨

＜私＞をめぐる記号論的アプローチの可能性—「カプグラ症」を例として

小島康次（北海学園大学）

＜私＞を哲学的心理学の視点から語る議論が多く見られるようになってきた。これは自己あるいは自我体験を独我論として見るアプローチの一つと考えられる。『ソシアの錯覚』（新山喜嗣、2011）はそうした思索をある極限まで推し進めた作品と言えよう。ソシアの錯覚とはカプグラ症候群のことで、新山（2011）はこの症例を独我論の視点から詳細に考察することによって、他者の他者性を保障するメカニズム、ひいては＜私＞としての自己のかけがえのなさを追求する視座としている。筆者は当初、「ソシアの錯覚」を記号論的に解釈することによって、＜私＞としての自己の存在論的意味を明確化する道筋を思い描いた。しかし、本シンポジウムにお招きした話題提供者の方々とのディスカッションを通じて、そうした議論の方向が必ずしも現象学や発達論の論理に適うわけではないことに気づかされ、改めて「ソシアの錯覚」のもつ理論的意義と難点を掘り下げてみることにした。新山（2011）が批判的にではあるが依拠する永井均（例：1998）の独我論（デカルト主義）への疑問を梃子に、記号論的解体を試みる。

独我論現象（ソシアの錯覚）によりそう精神科医の矛盾

麻生 武（奈良女子大学）

「ソシアの錯覚」というのは、視覚野と辺縁系や扁桃体との結合が切れたために今まで情愛を感じて知覚

していた人物にまったく情愛を感じられず（ラマチャンドラン，邦訳 2005）その現象を「お話の産出機である」左脳によって合理化され（ガザニガ，邦訳 2010）、その相手は偽物だ宇宙人だといった妄想を生じさせてしまう現象である。別名「カプグラ妄想」とも言う。非常に興味深いのは、複数のカプグラ妄想の患者に会った精神科医が患者の心的世界を理解しようとして、奇妙な哲学的思索を始めたことである。カプグラ妄想を持つことは、私たちの慣れ親しんでいる世界から、根本的に疎外され「他者には決して理解されないような」孤独を生きることである。その孤独を理解してこそ精神科医と言えるのではないか。新山善嗣氏はそのような無謀ともいえる難題に真正面からチャレンジしたと言えるだろう。それはミイラ取りがミイラになる世界である。深淵をのぞく者は深淵に吸い込まれてしまうのである。新山氏は危うい。独我論の語れない世界を語るというパラドックスを、綱渡りをしている永井均氏をまねようとしているのだが、患者を理解したい、その理解を人々と共有したいという医師としての良心が、永井氏のように狂えなくしているのだ。だが、狂えなければ地獄に堕ちる（陳腐な素人哲学者になってしまう）。他者という理解できない世界が存在することは、独我論として語るべきではない。「他者」とは何か、「ソシアの錯覚」から語るのには私には火遊びのように感じる。「私秘性」について発達的な視点から語ってみたい。それはまともな発達心理学のテーマである。／参考文献：『脳の中の幽霊、ふたたび』V.S.ラマチャンドラン 山下篤子訳 角川書店。『人間らしさとはなにか？』マイケル・S・ガザニガ著 インターシフト。『ソシアの錯覚』新山善嗣 春秋社。

カプグラ症候群と自我体験・独我論的体験への現象学的アプローチ

渡辺恒夫（東邦大学）

経験的根拠なく「貴方は本当の貴方ではない」と疑うのが純粹のカプグラ症候群だとすると、子供が突然「私は本当に X.Y か」「なぜ私は X.Y であり他の誰かでないのか」と疑う自我体験を自己カプグラ症候群として定義できないかが、企画者の問題提起らしい。ここでは自我体験が独我論的体験へ展開した「事例エミリ」を紹介し、次に質的研究としての現象学（渡辺，2013）による解明を提示し、それを踏まえ「貴方は本当の貴方か」という問いの意味を検討する。／自我体験は調査の進展によって全容が解明されつつあり、欧州での調査（Kohnstamm, 2004）も邦訳される予定で、セルフ発達研究への再考を迫るものになろう。ここで典型例として取り上げる「事例エミリ」では6歳児が自我体験から独我論的体験へ次の過程で至る。①突然「私は私だ」ということに気が付く。②私がエミリであるという自明さが不思議に思われて来る。③なぜ私はエミリ以外の誰かではないのかという疑問が生じる。④神の仕業かもしれないと考えるうち私自身が神ではないかと思いつく。⑤私が唯の少女でなく神かもしれないという秘密は隠さねばならない。／現象学的分析によると、①自己が唯一の中心であるような主観的世界の発見、②自己が同時に客観的世界の多数の自己の一例であることのおかしさ、③主観的世界の自己と客観的世界の自己の結び付きの偶然性の自覚、④神である自覚による自己の唯一性の担保、⑤神（唯一者）であると同時に只の子供でもあるという「化身教義」の創出。これがアッパー型独我論（他者に意識があっても自分には一段高い超意識があるので唯一者だ）に相当する。／故に「貴方は本当の貴方か」の問いは「貴方もまた唯一者なのか」と問うに等しいが、これはパラドックスになるので、超克は形而上学にならざるを得ない。／参考文献：『フッサール心理学宣言』（渡辺恒夫，2013，講談社）；“Und plötzlich wurde mir klar: Ich bin ich!”(Kohnstamm, D., 2004, Hans Huber Verlag).

現代の聖地巡礼ともの語りー時代と文化を超えて

企画：やまだようこ（立命館大学）・浦田悠（京都大学）

司会：やまだようこ（立命館大学）

話題提供：浦田 悠（京都大学）

後藤一樹（慶應義塾大学）

森本真由美（白百合女子大学）

指定討論：山田富秋（松山大学）

やまだようこ（立命館大学）

□企画趣旨

聖地巡礼は、さまざまな文化や宗教において古くから行われてきたが、現代の若者も引きつけている。聖地巡礼は、もの語り（ナラティブ）論からみると、大変興味深い観点を含む。聖地は、「奇蹟」「不思議」「非日常」「感動」と出会い、ある種の「神話」が発生するスピリチュアルな現場である。それは、現代においても新たに発生し、継承され、語り直される、もの語りが生まれるフィールドである。聖地を巡礼する人々は、伝承されたもの語りに参加し、生きたもの語りをアクションでなぞり、再び生き直し、自己が生まれ変わる人生もの語りを生きる。もの語りは、個人の人生経験にとどまらない。同行者とともに語り直され、新たなもの語りが共同生成される。聖地巡礼は、接待によるケアやサポートなど、民衆の共同参画の場でもある。心理学と社会学の若手研究者を中心に、学際的な新しい観点から、時代と文化を超える聖地巡礼のナラティブ論に挑んでみたい。

□話題提供概要

現代における聖地巡礼の多様な意味をめぐって

浦田 悠(URATA Yu) 京都大学

聖地の存在や巡礼という行為は、古来、諸宗教に広く共通する要素であったが、現代においては、たとえば、お遍路ブーム、アニメの聖地巡礼、被災地巡り、ダークツーリズム等、従来の宗教を超えて（しかし、実は広義の宗教的／スピリチュアルな要素を多分に孕みつつ）新たな形で取り上げられる機会が増えている。これらは一見相互に無関係な現象に見えるものの、個としての自分を越えた聖なる存在やコミュニアルな在り方を希求するナラティブ的な実践という観点から結ぶことが可能かもしれない。本発表では、このような新たな聖地や巡礼の在り方とその心理学的な意味について、改めて考えてみたい。

四国遍路のポリフォニーー交響する声と遍路の民衆文化

後藤一樹（GOTO Kazuki）慶應義塾大学

従来の先行研究において四国遍路は、近代的な権力の「まなざし」によって排除された者の行き場所、あるいは現代的な観光の記号を消費する場所として語られてきた。

しかし本発表では、そうした統一的な視点から遍路をとらえるのではなく、遍路を行き交う人々がそれぞれ自立した生活史とナラティブを持ち、彼／彼女らが遍路を通して親密な対話関係を取り結ぶ中で、他者の声、そして弘法大師の声を自身の声に響かせる実践の場として遍路を検証する。

具体的には、歩き遍路と接待者に聞き取りを行い、彼／彼女らの語りの「ポリフォニー（多声性）」（ミハイル・バフチン）の分析から、遍路の民衆文化を考えてみたい。

キリスト教の巡礼 ―内なる心の旅

森本真由美（MORIMOTO Mayumi） 白百合女子大学

年間700万人が巡礼するローマカトリックの総本山ヴァチカン市国、キリスト教三大聖地の一つであるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラをはじめ、ミカエルのお告げで建立されたモン・サン・ミッシェル、涙を流す奇跡のキリスト像に捧げられたヴィースの巡礼教会、聖人フランチェスコを讃えて建てられたサン・フランチェスコ大聖堂など世界遺産に登録されたキリスト教会建築や、聖母マリアの出現でも知られるファティマ、ルルド、パリの不思議のメダイ教会など。伝承と奇跡、そして祈りの場であるキリスト教巡礼地がもたらすメッセージは、巡礼者を癒し、ときには心の道しるべとなり大きな意味を持つ。聖地巡礼や、自らを「巡礼者」と呼んだイエズス会創始者イグナチオの心の巡礼記『靈操』による祈りの体験を通して、信徒がどのように「神に辿りつく道」を歩むのか。その語りから内なる心の旅を考えてみたい。

(6) ポスター発表

＊ポスター発表は 8 号館 5 階にある 10 教室で分かれて行います。発表者の方はご自分の番号と発表教室の
パネル番号を照合して、ポスターを貼ってください。

(番号) 1 から 8 まで…851 教室

9 から 16 まで…852 教室

17 から 24 まで…853 教室

25 から 33 まで…854 教室

34 から 42 まで…855 教室

43 から 51 まで…856 教室

52 から 60 まで…857 教室

61 から 69 まで…858 教室

70 から 78 まで…859 教室

79 から 87 まで…860 教室

1. 三重県答志島の青年宿にみられる文化的仕掛け I ―寝屋子制度と娘遊び―

澤田 英三 (安田女子大学)

三重県答志島には、江戸・明治期に日本各地に存在していた青年宿・寝屋子が現存する。鳥羽市の無形文化財に指定されており、現在は地元の人たちが「形骸化している」というが、そこには漁業コミュニティで必要とされる知識・技能伝達のみならず、青年の社会化を促す上でも重要な機能があつた。本研究では、松村 (2011, 2012) が提唱する仕掛け学の視点から、寝屋子や娘遊びといった制度・慣習としての「文化的仕掛け」が、青年の意識や行動をどのように導き、結果としてどのような行動の副作用をもたらしてきたのかを検討した。ある寝屋子への参加観察と聞き取り調査とともに、現在では行われていない「娘遊び」という慣習については、青年期にそれを経験したことのある寝屋親と寝屋子の協力のもと、「娘遊び」を擬似的に再現することによって、そこで行われるコミュニケーションの実際とその副作用的意味についての語りを具体的に関連づけて検討した。

2. 老年期の沖縄人における「距離化した当事者語り」と自己の関係に関する研究

野原みゆき (青山学院大学大学院社会情報学研究科社会情報学専攻ヒューマンイノベーションコース)

本研究は、戦後の沖縄で行われた言語普及政策の一環である「方言札」の語りに着目し、老年期の沖縄人の自己を実証的に捉えることを目的とする。

沖縄の方言札に関する先行研究は当時の小中学校の学校記念誌に掲載されている回想記から標準語教育を受けた児童生徒の意識調査が多く、方言札を巡るいじめや教師による体罰等が行われていたと報告されている。また方言札の経験者たちが方言札を苦痛に感じていたと記載されている。では実際に言語普及政策期の渦中を生きた人々は、方言札の経験をどのように語り、自己に意味付けているのだろうか。報告者は方言札を経験した老年期の沖縄人 (70?90 代) を対象に現地で半構造化インタビューを行った。結果、先行研究とは異なる被差別的な語りを行っている可能性が示唆された。この独特な語りを「距離化した当事者語り」と名付け、老年期の沖縄人の自己との関係を考察する。

3. 児童養護施設における支援モデルの再構成—職員の語りの縦断的变化より—

高橋 菜穂子（大阪城南女子短期大学）

高橋・やまだ(2012)では、児童養護施設の職員が、一旦分離された親子の間で、双方に寄り添いながら支援を行う様子をくむすび>としてモデル化した。本発表では、先行研究のモデルを、長期的な職員と子どもの関係にそって縦断的に検討した時、新たにどのようなことがみえるのかを提示したい。

今回分析するのは、ある少女が、18歳で施設を退所するまでの5年間に、担当職員に行った4回のインタビューと、少女の退所後に、同じく担当職員に行ったインタビューである。少女は、生い立ちへの葛藤や現状への不満を、問題行動として職員にぶつけ、支援は困難を極めた。特に退所を目前に控えた時期には、退所の準備に焦る職員と、職員の働きかけを重荷に感じる少女の間に大きなズレが生じた。担当職員は、その中で自らの役割を繰り返し問い直ししながら、新たなくむすび>を模索していた。そのような縦断的な語りの変化を、上記の先行研究のモデルに組み込み、再構成した。

4. 博物館における子どもと展示空間および展示物との「出会い (encountering)」

—来館者の博物館体験を理解する試み—

坂倉真衣（九州大学大学院・日本学術振興会）・南博文（九州大学）

博物館を訪れる人々は、そこでどのような体験をしているのだろう。「The Contextual Model of Learning」(Falk&Dierking 2000)によれば、博物館での体験とは、1) 個人的文脈、2) 社会的文脈、3) 物理的文脈という三者の重なりによって起こり、それらを時間軸にそって見ていくことができる。発表者は、本モデルを用いながら、その体験を特に来館者と展示空間および展示物との「出会い (encountering)」として捉えることで、来館者の博物館体験を理解しようと試みている。「出会い」として捉えることで、従来の「学び」では捉えることが難しいと考えられる来館者の体験の様相（文脈内に含まれるものの「ぶつかり」とそれを「つなぐ」という視点など）が見えてきた。本発表では、現場での観察によって得たいくつかのエピソードを挙げながら展示空間および展示物の「出会い」について考察を行う。

5. 断酒会〈リーダー〉のライフストーリーからみる回復と断酒会の現在

三好真人（明治大学大学院）

断酒会（公益社団法人・全日本断酒連盟）は、アルコール依存症者の当事者による自助組織である。日本においてメンタルヘルスの問題を扱った自助組織としては最も歴史が古い。半世紀以上つながる活動のなかで、当事者（個）、組織（内集団）、社会（対外運動）に渡る多様な活動を遂げている。

断酒会による回復と活動は、これまで多様な側面から扱われてきた。それらの研究者は、各々の視点から断酒会を切り取り、断酒会を描いている。そして、断酒会を日本における自助組織モデルと捉えてきた。しかし、近年断酒会は活動の歴史的な流れのなかで大きな転換点にある。会員数の減少、高齢化、依存症者の病態、社会的変化、行政による施策など問題が山積している。本報告では、活動を20年以上継続する断酒会〈リーダー〉たちから語られた、当事者として・断酒会会員としてのライフストーリーをもとに断酒会による回復と断酒会活動の現在を複眼的な視点で考察する。

6.ターミナル期を回顧的に語る－末期宣告から5年目のがん患者との継続インタビュー－

向後裕美子（東京大学大学院）・厚子さん

現在50代半ばである厚子さんは、2008年、医師から乳がん末期と告げられ、数ヶ月の入院の後、「死ぬために」家に帰ってきた。退院当初は、ほとんど寝たきりの状態だったが、厚子さんの病態は医師の予測に反して安定していった。継続していた抗がん剤を2013年8月に中止して以後、がんに対する治療は行っていないが、現在までにがんの進行は認められない。

ターミナル期の患者の経験は通常、現在形でしか語ることができず、過去の経験として回顧的に語られることはない。私たちのインタビューが始まった2011年12月、自分を「末期がん患者」と規定していた厚子さん、そして、自分を「ただの障害者」と規定する現在の厚子さんが、「末期」という経験をどのように語るのか、初期から現在までの語り方の変遷を辿る。今回の発表では、厚子さん自身の意見をより積極的に取り入れる共同作業を通して、「末期」という経験に接近したい。

7.ハンドセラピーを受ける患者が体験する信念対立の特徴とその対処法

多田哲也（吉備国際大学（通信制）大学院保健科学研究科作業療法学専攻修士課程）

目的：本研究では、ハンドセラピーを受ける患者が体験する信念対立とその対処法を明らかにした。

方法：構造構成的質的研究法を採用した。対象は信念対立を経験したハンドセラピーを受ける患者12名だった。

結果：6の大カテゴリー、16のカテゴリー、43の概念が得られた。信念対立の相手は患者自身と医療者であった。患者は＜認識状態＞と＜経験する苦悩＞との間で信念対立を起こしていた。また、患者の対処の1つである＜他への働きかけ＞に対し、＜医療者の反応＞によって医療者との信念対立が発生していた。一方で、＜医療者の反応＞次第で患者自身の信念対立の軽減もみられた。

考察：患者は医療者に信念対立の対応を望んでいると考えられた。また、患者は医療者の反応に対して敏感であると考えられた。そのため、医療者は効果的な反応を身につけ、患者自身の信念対立の軽減と医療者との信念対立の予防を図る必要があると考えられた。

8.グリーフケアに取り組む僧侶はどのように自分自身の悲嘆を経験するか

松下弓月（明治大学大学院）

世界一の高齢化社会となった日本では、今後は年間死亡者数の急増が予測されている。日本ではグリーフケア（以下、GC）は伝統的に仏教の僧侶によって担われており、その活動領域は終末期医療や自死遺族支援へも広がってきた。悲嘆経験は心理臨床家に実践的にも人間的にも大きな影響を与える（Kouriatis & Brown, 2011 など）。しかし、僧侶のそれはこれまで検討されてこなかった。

そこで本研究では葬送儀礼や遺族支援活動などのGCに携わる僧侶に、僧侶となるまでの経緯や自分自身の悲嘆に関する現象学的インデプスインタビューを行った（Siedman, 2013）。分析には、個人の生きられた経験の語りをもとに、その人が世界をどのように理解しているかを当事者の主観的な視点から明らかにしようとするIPAを用いた（Smith, et al. 2009）。そして死別に伴う悲嘆の経験がどのように個人的・職業的な成長につながり、GCの実践へ影響するのかを分析した。

9.関係性に着目した「発達障害」概念の様相

村田観弥（神戸大学大学院博士課程後期課程）

「発達障害」が世界的な広がりを見せ、国内においてもその用語の使用が我々の日常に深く浸透している。何故ここまで急激な広がりを見せるのか。本研究の目的は、研究者自身を取り巻く経験世界を掘り起こし、関係性より生じるその概念の意味作用を探ることにある。約1年のフィールドワークから得た記録群（フィールドノート、会話記録、インタビューデータ）を元に、現象学的解釈学を援用した循環型のテキスト解釈法を用い、研究経過の一端を開示する。「発達障害」とされる研究協力者及び周囲の同僚と研究者の関係の交通から明らかになるのは、その概念を多義的な隠喩的機能を持つ装置とし、自らの存在及び常識的世界を守る研究者自身の流動化する専門家態度である。

10.作業療法理論間の信念対立が起きるまで

古桧山 建吾（吉備国際大学）・京極 真（吉備国際大学）

目的：本研究では、作業療法理論間の信念対立が起きるまでの非可逆的時間経過を明らかにした。

方法：16名の理論間の信念対立を経験したことがある作業療法士（OT）を対象にインタビューを行なった。

その後、信念対立が起きるまでの非可逆的時間経過を複線径路・等至性モデルを採用し、可視化した。

結果：理論間の信念対立が起きるまでに、OTは自身の得意とする理論を深化させている過程があった。その後、「理論への信頼」を持つことを必須通過点として理論間の信念対立が起きていた。理論に準拠した実践そのものが目的になっているOTは、共通目標の設定が困難で、信念対立がより深刻化しやすいと考えられた。信念対立後も理論を手段として相対化出来るOTは、考え方の異なるOTとも患者の共通目標の設定に努める傾向にあり、「クライアントに対する共通目標を持つ」という等至点に至った。

考察：理論に準拠した実践そのものが目的になっているOTとは、共通目標の設定が困難で、信念対立がより深刻化しやすいと考えられた。OTには、目的と状況に合わせた理論選択をすることが期待される。

11.映画を用いた集団間異文化理解への試み

呉 宣児（共愛学園前橋国際大学）

筆者は、共同研究者たちと共に、集団内のメンバー同士が他文化に対する理解を深めるだけでなく、異なる集団間で交流を行うことにより、集団間で異文化理解をより深めていく教育実践を試みてきた。交流授業は、日本と韓国の大学がペアになり、まず、それぞれの授業で同じドキュメンタリー映画―「あんにょん・サヨナラ」を視聴し、①集団内（日本の授業内、韓国の授業内）での意見交流、②感想文交換による集団間（日韓）での意見交換と互いの「感想」に関する意見交換を行い、③まとめの講義で解説をしながら、互いの認識がどのように異なるかを検討し、相互理解のための方向性を一緒に考えるやり方で行われた。これらの授業の流れや内容をまとめ、実践授業の意義や今後の課題に関して議論しつつ、集団間対話のなかで見られる変化について考察していく。

12. 東日本大震災被災地における「書道教室」の参与観察研究（2）

河合直樹(京都大学), 永田素彦(京都大学)

本研究の目的は、東日本大震災被災地で継続的に開催している「書道教室」が、被災地の内発的復興を支援する可能性を示すことである。

書道教室は、2012年10月以降、岩手県野田村にて毎月開催している。前回大会では、「書く」「見る」という2つの行為に着眼し、書道教室が「参加者同士の新たな交流」と「前向きなアイデンティティ変容」をもたらす可能性を論じた(河合・永田, 2013)。本発表では、以上の議論を、理論・実践の両側面からより詳細に検討する。まず、復興支援であることをあえて強調しない活動が、支援を受けることを当たり前とみなしてしまう被災者アイデンティティから参加者を「ずらす」効果をもつ可能性を、「復興といわない復興支援」という概念を導入して理論的に検討する。そのうえで、新たな参与観察データを参照して、参加者の相互交流とアイデンティティ変容が進んでいることを示す。

13. 「場」が遊びを Guidance/Direction する力ー「場」の質的変容を描き出す分析方法の提案ー

香曾我部琢(宮城教育大学)

レヴィンの「場の理論」に代表されるように、空間に配置された建物や樹木などの建築物・自然物、そしてそこに生きる人々が生み出す社会や文化が、個人の活動に強く影響を与えることについてこれまでも多くの研究者によって示されてきた。そして、人の活動に影響を与える環境や状況を「場」と名付けて、その重要性が示唆されてきた。

そこで、本研究では、幼児の遊びに「場」が与える影響について着目し、その時々には立ち現れては消える遊びを Guidance/Direction するの質的な力の変容を明らかにすることで、「場」が持つ力の質について検討を行い、その分析方法の提案を行う。

具体的には、はじめに、ごっこ遊び場面の展開を複線径路・等至性モデルで時系列に並べ、遊びに影響を与えた Social Guidance/Social Direction を明らかにする。そして、次に、その中から、その場に在る物理的な環境が遊びに強く影響を与えた項目を抽出し、その場のジオラマの中に移して、場が持つ遊びを Guidance/Direction する力の質的な変容を描き出す。

この結果をもとに、「場」が持つ力の質について検討を行う過程で、「場」を対象としたさまざまな研究への適応可能性についても検討し、「場」の分析方法を提案する。

14. 自死遺族のナラティブに対する一考察ー対話的自己論からの検討ー

古井(橋本)望(東京大学大学院教育学研究科)

Hermans ら(1993)によって提示された対話的自己論では、私たちの自己世界には多様な I ポジションがあると考える。私たちは多様な I ポジションの間を移動し、それぞれの立場からの語り(me)を語る。またそれらの I ポジション間には対話的な関係(eg. 賛成ー反対、理解ー誤解 etc.)があり、そこでダイナミックなやりとりが生起していく。こうした対話的な関係の中で、複雑な語りとして自己物語が構成されていく、と考えることができる。

本発表では、インタビュー場面で語られた『自死遺族としての自己ナラティブ』を対話的自己論の立場から分析する。自死遺族の悲嘆に特徴的な反応の一つとして自責感が指摘されているが(坂口, 2010)、“自責する遺族としての I ポジション”を中心に、他にどのような I ポジションをとりうるのか、また I ポジション間の対話的な関係にはどのような側面が見られるのかを検討する。

15. 保育者の「臨機応変さ」とは何か

勝浦眞仁（旭川大学短期大学部）

保育者は子どもたちに柔軟なかかわりをすることが求められており、いわゆる臨機応変な対応の必要性はこれまで様々に言われてきた。しかし意外にも、保育者の「臨機応変さ」とは何かについて、これまで十分に検討されてきたとは言い難い。そもそも保育には「不確実性」が付き纏い、保育者の思惑通りにいかないことや予想もしなかった子どもたちの応答、また偶発的な出来事が起こりうる。この「不確実性」が際立つ場面でこそ、保育者の「臨機応変さ」が問われることになる。

本発表では、ある療育施設の放課後デイサービス事業における学童保育を関与観察する中で起きた、「不確実性」を伴う場面に着目し、その体験をエピソード記述することを試みた。そしてエピソードに検討を加え、「不確実性」の中で子どもたちとのかかわりの糸口を見だし、じっくりといく関係の中に子どもたちを包み込んでいく保育者のあり様について議論した。

16. 日常会話におけるオノマトペの表出—文脈とのインタラクション—

郷原皓彦（九州大学大学院人間環境学府）

我々は日常会話の場面で、「親にガミガミと叱られてしまったよ」のようにしばしばオノマトペを意識的に使用するのみならず、無意識的に口にしている。本研究ではこれをオノマトペの表出としている。では、我々は日常会話でなぜオノマトペを表出するのだろうか。また、日常会話でオノマトペは会話の文脈とどのように関わりあっているのだろうか。

この問いを検討するためには、オノマトペそのものの特徴に着目するだけでなく、オノマトペの表出される会話の場一つ一つに特有の文脈に焦点を当てた研究が必要であると考えられる。そこで発表者は自身が参加した日常的な会話場面で表出されたオノマトペをフィールドノートに記録し、それを参照してオノマトペの表出された会話の場をエピソードとしてまとめた。それらを考察し、話者自身の知覚や体験がオノマトペの表出を通して会話の場に強く立ち現れることで、オノマトペと文脈は相互作用していることが示唆された。

17. 休憩・休暇における看護行為の質的分析による看護師の持つ患者への関心と関与の構造

駒崎俊剛（東京医療保健大学）

看護師の休暇・休憩・仮眠が不十分な勤務状況（日本看護協会，2008）では、エラーやニアミスの増加（金子，2007）につながり、患者への安全な医療の提供や看護師の心身にも影響を与える。このような「休めない」状況への対策は進んでいる。一方、これまで重視されてこなかった患者へ関わりたいという意識から「休まない」看護師の内発的な患者への関心とそれに基づく関与の形態について検討する。そのために、制度上は患者に関与不能な場面つまり、休暇・休憩における看護師の行為を記録し、それぞれの行為についてインタビューを実施し、インタビューデータを KJ 法により分析した。この分析から患者への関心は、続くが関与不能の場合には、代理人により患者へ関与する形態、患者へ関与する代理人として同僚を育てる形態、患者への関心を切断するために同僚への関与を行う形態があることを報告する。

18. 幼稚園入園後 2 年間にみる他児の対人葛藤場面への「介入」の形成過程

松原 未季（奈良女子大学大学院/日本学術振興会特別研究員 DC1）

本発表では、幼稚園 3、4 歳児が他児の喧嘩やいざこざにおいて示す介入行為のうち、注意と加勢の二つに着目し、これらの介入がどのように変化するのかに焦点を当て、入園後 2 年間ににおける他児の対人葛藤場面への「介入」の形成過程を明らかにすることを目的とする。その手法として、幼稚園 3 歳児クラスに入園直後から 4 歳児クラスの修了までの 2 年間同一のコホートの幼児を縦断的に観察し、カテゴリーのコーディング及び事例の解釈的分析を行った。「介入」が形成されるようになるには、介入者の行為形成と意思決定の双方が必要であり、行為形成には、注意に象徴的な行為の「型」の模倣から始まり、意思決定には加勢に見られるような、状況変化への意志の形成と表現があると考えられる。3 歳児の初め頃は、行為形成を用いた介入が多く見られるが、4 歳児になると、行為形成と意思決定を統合して介入するようになる、と推測される。

19. 中学校数学科のグループ学習過程における論点を明確化させる援助要請の特徴

—中学校 2 年生 1 学級の事例から—

山路茜（東京大学大学院）

本研究は、グループ学習過程で論点を明確化させる援助要請の特徴について、数学科固有にみられる振る舞いを明らかにし、協働学習デザインに示唆を得ることを目的とする。中学校 2 年生 1 学級の数学授業を 6 か月間観察し、映像と 10 グループの音声および生徒のノートを集めた。変化の割合と直線になるグラフの関連付け、座標平面上の四角形を等分する直線の式の求め方を扱った 2 授業を対象に、グループの談話記録とノートから、質の高い援助がみられた場合とそうでない場合を分析した。

その結果、おいた文字が表す事柄の確認、解決方針の中で必要な数学の定義・性質の確認、簡略な具体数の代入による文字式の意図の問い直しの 3 点の援助要請が論点を明確化させる振る舞いとして描かれた。中学生にとって数学の議論をグループによる協働で展開させる際には、解決方針を援助し合う以外に数学的表象を問う援助要請スキルの形成が重要であると示唆された。

20. 大学生女性への心理療法のナラティブ・プロセス—10 回の短期面接データの質的分析—

小泉 誠（神戸大学）

小泉・岡本・森岡(2011)において、9 事例の試行カウンセリングの面接記録(第 1・5・10 回)を Angus, Levitt, & Hardtke(1999)の分析モデルに基づき、コーディングを行い、数量的分析を行った。その結果、面接の経過に従って、外的出来事の語り減少し、内的感情・内省的な語りが増えることが示唆された。本研究は、9 事例のうち最も内的、内省的な語り豊かな事例であり、実際の心理療法場面に近い事例を取り上げ、10 回分すべてを面接記録に NPCAS(Angus et al, 1999)を用いたコーディングを行う。さらにその心理療法プロセスを質的に分析する。大学 4 年生の進路の岐路に立っているクライアントの母親との依存と自立の葛藤という内容の分析とともに、内的、内省のモードがどのような形式、構造で生じるのかをクライアントとセラピストの共同生成という観点から考察する。

21.語り方からみるろう者の自己・関係性の変容

広津侑実子（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では、ろう者（聴覚障害のある人）への複数回インタビューにおける、自己や関係性に対する意味づけや語り方の変化について検討する。それぞれ3回ずつインタビューを実施した、Bさん（30代女性）の語りとCさん（20代女性）の語りに対して、ナラティブ分析（Bamberg,2010）を行った。

分析の結果、Bさんは、周囲からのかかわりに対して受動的・被害的な思いを抱えている状態（#1 個別・#2 個別+他者が時々滞在）から、仲間との関係性を能動的に使いながら主体的に過ごしていく姿（#3 グループ）へと変化していた。一方、Cさんは、一貫して能動的に行動できていると語っていたが、自分の感情を直接的には語らない客観的・第三者的な語り方（#1 両親同席）から、秘めている葛藤や迷いを盛り込みながらの語り方（#2・#3 個別）へと変容していた。これらの変化は、語りの深まりと共に、インタビュー場面での関係性や現実生活での関係性の影響も受けていると考えられた。

22.ポスト震災社会における安心・安全コミュニティの構築と持続性

馮キョウ（茨城大学）

2011年3月11日、東日本大震災が発生し、太平洋沿岸の広い地域が津波により襲われ、それまで存在していた地域コミュニティの機能が損なわれた。北茨城市は茨城県内でもっとも大きな被害を受けた地域のひとつである。本研究では、住まいや職場など基本的な生活基盤を失った人々によって立ち上げられた「北茨城市あすなる会」（以下「あすなる会」）をフィールドとして、まず、震災後立ち上げられた地域コミュニティの構築過程を明らかにする。また、このような災害後などに一時的にしか存在できないとされる「災害ユートピア」としてのコミュニティがそのまま存続しがたい要因を分析し、そこでできた人とのつながりをいかにすれば持続させられるのかを明らかにする。さらに、被災者たちにとっての安心・安全コミュニティに関する要件について検討する。

23.主観的幸福感のコミュニケーション論からの再考——日再現法（DRM）による検証——

祁秋夢（九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻）

・南博文（九州大学大学院統合新領域学府）

主観的幸福感とは人生や生活が自分にとって、どの程度幸せなのかを生活者自身が評価するもので、生活の質を判断する際の重要な指標とされてきた。従来の研究では、「主観的」側面を測定するため、本人自身の判断に委ねるという形が採られた。しかし、探求されるべき問題は、幸せを感じるような日常生活体験がいつ、どこで、どのような状況と関係性の中で現れるかであり、また、主観的幸福感とは、尋ねられた時に初めて顕在化するという特質を持つと考えられる。

本研究は、日再現法 Day Reconstruction Method (DRM：調査協力者は前日を振り返り、其々の出来事について当時の状況と感情を回答する)を用い、その後半構造化インタビューを加えるというデザインを実施した。本発表では、自身との対話（前日を振り返る）と他者との対話（半構造化インタビュー）という2種のコミュニケーションを通して、生きられた体験がどう評価された経験になっていくか、その意味構成の過程について考察した。

24. 近年の質的データ二次分析の動向

澤田明子（いわき明星大学）・佐藤（佐久間）りか（DIPE x -Japan）

昨今、保健医療領域においては、ナラティブデータの収集が盛んにおこなわれている。一方、患者を対象とする調査は、協力者の人権、個人情報保護をめぐる倫理的要請の高まりを受け年々厳しくなっている。こうした中、既存のデータを新たな研究関心から分析し活用する二次分析が、質的データにおいても注目されつつある。“Reworking Qualitative Data” は、J. Heaton によって 2004 年に刊行された質的二次分析の方法論や認識論を検討した数少ない研究の一つで、二次分析をタイプ別に分類し、研究デザインからデータ選択、分析方法、質の担保や研究報告のあり方に至るまでの様々な留意点を整理している。本報告では Heaton の方法に照らし、2013 年に発表された質的二次分析研究を中心に、近年の質的二次分析研究の動向をレビューし、Heaton の分類法や課題が今日的意義を持ちうるか検討する。

25. 大学の講義におけるフォーカシング体験実習にインタラクティブ・フォーカシングを導入する意義についての一考察

－変形 TEA による実習内容とフォーカシング親和感の変化との関連の検討－

玉澤秀寿(九州産業大学大学院)

Cornell(1996/1999)は「フォーカシング(以下 Foc)をする能力は誰もが生まれながらに備えているもの」としている。しかしながら、Foc に困難を感じる一群の人々の存在も報告されており(中田・村山, 1986 など)、教え方について検討がなされている。本研究においては、Foc を「役に立つ」あるいは「好き」と感じる主観的感覚を「フォーカシング親和感(以下 FAF)」と定義し、大学の講義として実施された Foc 体験実習において、その実習内容と FAF の変化との関連が検討された。全 5 回の Foc 体験実習のうち、第 5 回は通常の Foc よりも日常の対話に近い形式であるインタラクティブ・フォーカシング(以下 IF)が導入された。毎回の講義終了時に SD 法による質問紙調査を実施し、その結果を元に、複線径路等至性アプローチを援用した図を用いてインタビュー調査が行われた。結果として、IF を導入することで FAF が上昇した事例の存在が示され、Foc を教える際に IF を導入する意義について検討がなされた。

26. 高齢者の状況把握（安否確認）における個別性

－サービス付き高齢者向け住宅事業者と入居者の役割に注目して－

竹内みちる（高齢者住宅研究所）

近年、高齢者の単独世帯が増加しており、孤独死問題が社会問題化している。これに伴い、民間事業者による高齢者向け見守りサービスや、「地域の助け合い」を主要資源とする地域福祉の展開について論じられるようになってきている。しかし、高齢者の心身状況や生活状況は様々であり、実際にどのように各人に合わせた形での見守り支援が行われうるのかについては、明らかでない。

本研究では、必須サービスとして状況把握（安否確認）・生活相談サービスのみが設定されている高齢者向けの賃貸住宅であるサービス付き高齢者向け住宅（2011 年 10 月に制度化。上記サービス面の条件以外に、ハード面の条件と契約面での条件を満たす単身者・夫婦世帯用の住宅）で、状況把握（安否確認）として、サービス提供者である住宅事業者は、各人に合わせた形でいかなる見守り支援を行っているかを、33 住宅へのインタビュー調査から明らかにする

27.介護老人保健施設のエスノグラフィ

狩野慶（茨城大学大学院教育学研究科）

高齢化社会を迎えた我が国において、平均寿命の伸びとともに、65歳以上の高齢者人口は今後数十年増え続けることは確実視されている。いまや介護保険施設や病院で人生の最後を迎える者が8割を占めている現代において、拡大し続ける老年期をいかに生きるかということが問われている。なかでも介護に関するさまざまな問題が注目されている。

介護職員の過酷な勤務実態や高い離職率、高齢者虐待などに関心が寄せられているなかでも、介護保険施設の利用率は、その社会的要請から今後も9割以上という高い水準を保ちつづけることが予想されている。施設を利用している高齢者とその家族、そこで働く職員の心理の諸相をエスノグラフィの手法を用いて明らかにすることによって、現代の介護がどのような問題を内包しながら、どのようにバランスを保って成り立っているのかを明らかにする。

28.KJ法とインタビューからみる「萌え」のありかた

松原実香(立命館大学)

「萌え」とは日本をアニメ・マンガ文化に親しむ人々の中で発生し、現在では架空のキャラクターのみならず実在の人物や動物、建造物や植物などの無機物にいたるまで、幅広い事象への特別な好意の意味で使われるようになった言葉です。「萌え」を心理現象としてとらえ、どのように「萌え」が起こるのか、人々は他の概念ではなくなぜ「萌え」を用いるのかというテーマの研究の一部として、KJ法による「萌え」の体験がある人となない人での概念の比較、インタビューによる「萌え」の起こり方や特徴について発表をおこないます。

29.小規模校単学級中学校のフィールドワークー単学級での閉塞感を和らげる方策の検討ー

小室厚子（茨城大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻）

本研究の目的は、小規模校単学級中学校における閉塞感を和らげるための方策を見いだすことである。単学級とは、各学年の学級数が1学級であることである。クラス替えがなく、メンバーが基本的に変わらないことから、生徒は閉塞感を抱くようになるのではないかと考えられる。閉塞感は、個人が抱く負の感情に留まらず、集団のメンバーで共有されるものである。単学級経験者の大学院生及び社会人にインタビューを行い、中学時代を振り返ってもらったと、自分の「キャラ」が変えられない苦しさがあったということが明らかになった。さらに、単学級中学校への参与観察、単学級に勤務する教員へのインタビュー、3年生女子の座談会を実施した。それらから、高校進学後、友達の作り方が分からなくて不安といった閉塞感があることが示唆された。閉塞感は、必ずしも否定的に働くとは限らないが、それを和らげる方策について検討を行った。

30. 小学校教師のケアリングに伴うジレンマ

—感情的発達に関する支援と学習活動に関する支援のあいだで葛藤する低学年担任を事例として—
芦田祐佳（東京大学大学院）

本研究の目的は、児童の感情的発達に関する支援と学習活動に関する支援の双方の必要性が教師のケアリングに引き起こすジレンマを、教師と児童の相互行為と教師の語りから検討することである。小学校1年生1学級に参与し、児童の感情表出を発端とした児童と教師の相互行為の観察と、観察された相互行為に関する教師へのインタビューを行った。そして教師が児童へのケアリングに難航したと考えられる一事例を取り上げ、相互行為と語りの解釈を行った。

その結果、教師は児童の感情的発達に関する支援を行いながら当該児童や他児童の学習活動に関する支援を行う必要があるために、当該児童の感情面に対するケアリングに「没頭」できず、ケアリングに不十分さを感じていることが分かった。しかし、実際に行ったケアリングに関する省察的な語りはあまりなく、両立しがたい学習活動に関する支援によってケアリングが断片的に行われていることとの関連が示唆された。

31. 大学生はいかに自らの「やる気」を語るのか—動機をめぐるナラティブ・アプローチの試み—

保坂裕子（兵庫県立大学）

本研究は、大学生による自らの「やる気」についての語りを分析することで、その要因や発達的变化の検討を試みるものである。幼少期からの「やる気」体験についての語りを求め、そこで取り上げられるトピック、またそれに関わる人間関係やディスコースを中心に分析を試みる。「やる気」は、安定した個人の要素や特性ではなく、その目的や関わるさまざまな要因のなかで揺れ動く。いま大学生としての自分自身を考えると、どのような過去経験が想起され、どのような要因分析がなされるのか。その多くは、学校経験にまつわるものであり、学校経験についての学び手の意味づけを理解することにもつながる。またその語りは、「大学生としての自分」のアイデンティティの語りとしても分析できよう。本研究は、自らの「やる気」経験を想起する際の手掛かりシートを用いて語りを引き出す試みでもあり、ナラティブ研究におけるツールの活用についても検討したい。

32. 患者—医療従事者間の相互性により生じる困難

—医療従事者を対象としたインタビュー調査から—

福田茉莉(立命館大学)

社会・経済格差、貧困、孤立という現代社会が直面する問題は、地域の患者や住民が直面している問題であり、医療機関でも直面せざるを得ないのが現状となっている。したがって、本研究では、「困難に直面している患者・住民の実態」と「困難に直面する患者を支援する医療従事者がもつ困難」を明らかにするために、医療従事者を対象としたインタビュー調査を実施した。調査協力者はある医療機関に勤務する医療従事者17名であった。調査の結果、患者の困難性には、difficult patient に代表されるような「対応が難しい患者」だけでなく、生活困窮や介護者の不在により医療機関への受診そのものが困難な事例が明らかになった。しかし、患者のもつ困難と医療従事者がかかえる困難は不可分な事例が多く、患者が抱える困難は、“医療機関という場”、“患者—医療機関間の相互的空間”が抱える問題として、包括的な視点から議論する必要がある。

33.国際結婚家庭における子育てについての初期分析

藤岡勲（同志社大学）

日本において国際結婚が増えており、国際結婚についての研究も少しずつではあるが発表されてきている。ただ、国際結婚家庭における子育てのありようを中心に扱った研究は限られている。国際化が進む社会において、国際結婚家庭における子育てのあり様を明らかにし、求められる対応を検討することは、急務の課題と言える。また、国際結婚家庭における子育てと、これまで議論されてきた一般家庭における子育ての同異を検討することは学術的な意義もあるだろう。本報告では、国際結婚家庭において母親の立場にあるインフォーマントへの子育て体験についてのインタビュー調査のデータに対して行った初期分析を通して、国際結婚家庭における子育てのあり様について検討を行う。そして、結果の学術的意義、および、実践的意義について議論する。

※データは、2011 年度日本臨床心理士資格認定協会研究助成によって得ることが可能となった。

34.セルフヘルプ・グループにおける非当事者の参加のプロセス

－「非行」と向き合う親たちの会における研究者自身の語りの変化に注目して－

北村篤司（東京大学大学院教育学研究科）

本研究では、研究者であり非当事者である筆者がセルフヘルプ・グループ（SHG）に参加し、関与していく過程を検討する。筆者は、「非行」の子どもを持つ親たちの SHG において、当事者である親たちの語りが、グループとの相互作用の中で変化していくことを明らかにした（北村・能智,2014）。一方、この SHG には、当事者以外の参加者もいる。先行研究では、SHG と非当事者である専門職が対等な関係を築く意義やその条件などが議論されてきたが（松田,2006）、非当事者とグループとの関わりも、その場の文脈や時間の経過の中で変化するダイナミックなものと考えられる。筆者自身、学生の立場で参加を始めたが、4 年間参加を続ける中で、様々な役割ができ、グループとの関わり方にも変化がある。本研究では、主に筆者のグループ内での語りに着目し、筆者とグループとの関係性が変化していく過程を明らかにし、非当事者がグループに参加するプロセスやその意義について検討する。

35. 同質性の高い集団における特定語の利用を介した内部規範の再生産に関して

石田沙織（明治大学）

本発表では腐女子集団内部の同質性の高さに着目し、当該内集団における特定語句の利用をめぐる理解、そしてそれが集団内部で規範化ないし同調の過程にどのように関わるかを主題とし、文献における例、また実際の使用例などを通して考察する。腐女子はかつて「やおい」「BL」といった語句を、自身の愛好する「男性同士の恋愛を描いた作品」に対して用いてきたが、同様に「ホモ」という語句を利用する様も、Twitter などの SNS 上、またイベントにおいて確認される。このような集団の内と外とで理解の差が大きい語句を、腐女子集団内部において利用される文脈や状況を捉え直す。これにより、腐女子に顕著な態度として見られる「現実とは現実、妄想は妄想」という視点の切り替えに伴う当該語句の利用と理解が、内集団－外集団の判別に作用し、腐女子内部の規範とスティグマが再生産されていく可能性について検討する。

36. 医師がトラブルメーカーという立場を構築するまで—複線経路・等至性モデルを用いて—

山森真理子（吉備国際大学（通信制）大学院保健科学研究科作業療法学専攻修士課程・茅ヶ崎新北陵病院）・
京極真（吉備国際大学院）

目的：本研究は、医師がトラブルメーカーという評価をうける過程を明らかにした。

方法：対象は16名の医療者で、分析は複線経路・等至性モデルで行った。

結果：トラブルメーカーの医師と働いた体験を語った事例は5つであった。5つのデータを分析し、必須通過点に「常識から逸脱する行為」、「気性が激しい」、「行為の訂正が不可能である」があり、等至点に「トラブルメーカーであると認識される」があった。他方語りには、医師がトラブルメーカーになる理由に関する洞察を反映した内容は皆無だった。

考察：医師がトラブルメーカーとラベリングされる3つの条件が明らかになった。これらの条件を満たしにくいチーム体制、職場環境を整備すれば問題を起こす医師の予防、低減になると考えられた。トラブルメーカーの原因に関する語りが無い理由は、トラブルメーカーの医師に対処する医療者が職業性ストレスの増大により思考停止するためであると考えられた。

37. 身障者アスリートは競技をどのように意味づけるのか

大槻優希（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）・豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

本研究は「身障者アスリートは競技をどのように意味づけるのか」というリサーチ・クエスチョン（以下、RQ）を設定し、質的にアプローチを行い、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。具体的には、RQをもとに身障者の陸上競技チームへのフィールドワークを敢行した（計55回）。そこに所属する身障者アスリート（肢体不自由者）13名（男性12名、女性1名）を対象とし、彼等が競技に取り組む中での発話、行動、相互作用についての参与観察を行い、身障者アスリートの日常的な取り組みを詳しく記述しようと試みた。そして、そのようにして得られた記録を用いてRQの構造化を行い、それらをもとにインタビューマニュアルを作成した。その後、対象者との半構造化インタビューを実施し、得られたデータをもとに質的研究の代表的手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析を行い、抽出されたカテゴリー間の関係を検討している。

38. 教師は鬼ごっこをどのように見ているのか

西村拳弥（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）・豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

本研究は、「教師は鬼ごっこをどのように見ているのか」というリサーチ・クエスチョン（Research Question：以下RQ）を設定し、質的にアプローチを行った。インフォーマント（Informant：情報提供者）は継続的に鬼ごっこの指導を実施している小学校において、体育主任を務める男性教諭1名（26歳、教師歴3年目）である。小学校の鬼ごっこ指導の際において取り組みに対する教師自身の視点や考え方、悩み等に関連した内容で、1対1の半構造化インタビュー（90分程度）を実施した。そこでの会話をICレコーダーに録音し、その内容を逐語化しインタビューデータと位置付けた。分析方法はKJ法（川喜多，1986）を継承した質的研究法である、質的統合法（山浦，2012）を用いて研究を行った。そして、上記のRQの下、教師の経験を可視化し、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした。

39. 大学野球選手は焦りをどのように語るのか

小林拳大（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）・豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

本研究は、「大学野球選手は焦りをどのように語るのか」というリサーチクエスションを設定し、質的にアプローチした。インフォーマント（Informant 以下、Inf.）は、大学の硬式野球部に所属している選手1名（男性、20歳7ヶ月、競技歴13年）である。研究方法は、Inf. に対して1対1形式の半構造化インタビューを実施し、そこでの内容をICレコーダーに録音した。インタビューでは、野球場面などで焦った場面について想起してもらい、焦りをどのように感じて、どのような体験であったのかについて語ってもらった。その後、上記の内容を逐語化して、インタビュー資料とし、KJ法（川喜田、1986）を継承した質的研究法である質的統合法（山浦、2012）を用いて分析を行った。そこから、大学野球選手の焦りを可視化し、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目指した。

40. 知的障害のある人の「声」はどのように聞かれているか—先行研究の分析を通して—

古井克憲（和歌山大学教育学部）

本報告では、知的障害のある人を対象としたインタビュー論文の分析を通して、調査者がどのように彼らの「声」を聞き、どのような社会的文脈の中で結果を公表しているかを整理し、その意義と課題について提示する。

分析の結果、彼らの「声」は、調査者により入所施設での否定的経験といった被抑圧者として聞かれ、彼らの生活改善を主張する根拠とされていた。また、福祉の理念や制度の転換期に合わせて、サービス利用者として聞かれるようになっており、地域生活の改善のために、知的障害者であることが一つの方略としても捉えられていた。

知的障害のある人の「声」を聞くことは、依然として抑圧的立場にある実態を明らかにする点に意義がある。一方で語られたことに加え、生活文脈やコミュニケーションパターンをも含め分析する点、及び制度的変化の影響により、彼らの生活様式が多様になる中で彼らの「声」の代表性、独自性を検討する点が課題である。

41. 発達障害児の母親の語りのなかに見る家族のつながり

—「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ—

沼田あや子（首都大学東京人文科学研究科）

本研究は、発達障害児の母親が語る、子と父親（夫）と暮らす日常生活のエピソードに着目し、家族との関わりの中で生きている母親の物語を発掘しようとする物語発掘型の研究である。母親—子、母親—父親の二つの関わりについての母親の語りを、それぞれ修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）で分析した。その結果、自らの経験や思いを支えにして、主体的に子や父親と関わり、なんとか家族をつなごうとする母親の姿が明らかになった。それは、従来の障害児の母親研究で描かれてきた「葛藤の物語」ではない、日々の課題に対して自ら考え、体を動かし実践することで乗り切る「しなやかな実践の物語」といえる。本研究の結果が従来の研究における母子関係への偏りをわずかでも修正すると同時に、家族の中の母親に着目したことで発掘した「しなやかな実践の物語」が、母親と呼ばれる人間の多様性を示す一助となり得たのではないかと考える。

42. 園内研修ツールとしての複線径路・等至性モデル (TEM) の可能性と展望

境愛一郎 (広島大学大学院)・保木井啓史 (広島大学大学院)・濱名潔 (広島大学大学院)

・中坪史典 (広島大学)

保育者にとって同僚らとの園内研修は、日々の実践を振り返り、次の実践に向けて子ども理解を深めるための機会である。しかし、園内研修で子ども理解を深めるためには、活発な語り合いのほか、事例を丁寧かつ柔軟に解釈する用意や、他者もしくは普段とは異なる視点を体験するための仕掛けが必要である (渡辺 2000 ; 小田 2010)。

本研究では、園内研修を通して保育者が子ども理解を深めるためのツールとして、子どもの経験のプロセスを描き出し、その意味を追求できる複線径路・等至性モデル (TEM) (サトウ 2009; 安田・サトウ 2010) に注目した。そして、保育中の子どもの姿をもとに、保育者が協働で取り組むことができる研修ツールとするため、TEM の分析手順や概念ツールの再編成を行った。本研究では、実際に TEM を応用した園内研修を体験した 9 名の保育者に実施したインタビューを分析し、園内研修ツールとしての TEM の可能性を明らかにするとともに、実用化に向けた展望を示す。

43. 性産業に従事することの意味 1 —GTA による分析—

池田真弓(淑徳大学)・青木希美(淑徳大学)・宮島綾香(淑徳大学)・中坪太久郎(淑徳大学)

性風俗で働くということには、様々なイメージが付きまとう。そのような特殊な職業であるにも関わらず、これまで研究として扱われることは少なかったように思われる。本研究では、「女性が性産業に従事する意味」について検討することを目的とする。対象は性産業に従事する 20 代女性で、約 1 時間のインタビューデータを基に、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行った。その結果、13 個のカテゴリーが生成され、モデル作成と考察を行った。性産業を続ける要因として金銭的な問題のほか、対象者の身近な人に生じる負の気持ちに対して、性産業のお客から得られる正の気持ちによって精神的バランスを取っているような現象が見いだされた。性産業を営む場において、主に快の感情によるコミュニケーションがなされているということが、性産業に従事し続けることを後押しする要因の一つになっていると考えられた。

44. 性産業に従事することの意味—会話分析による検討—

青木希美(淑徳大学)・宮島綾香(淑徳大学)・池田真弓(淑徳大学)・中坪太久郎(淑徳大学)

性産業は直接的に身体を客に提供するという意味で、特殊な職業のひとつだと考えられる。そこに従事している女性の気持ちや意識について研究的に明らかにされたものは少ない。そこで本研究では、「女性が性産業に従事する意味」について検討することを目的とする。対象は性産業に従事する 20 代女性で、約 1 時間のインタビューデータを基に、会話分析を行った。その結果、10 個の会話の特徴が見いだされた。特筆すべき点として、①肯定表現の頻発、②共感・同意を求める発語の頻発、③自分をタイプ分けしてから会話が進むといった点が挙げられた。自分自身に向けた相槌や、インタビュアーに対して同意や共感を求める表現を用いることで、自身がインタビュアーと同じ立場にいることを確認し、自己肯定する役割があると考えられた。また、自分を「～するタイプ」とカテゴリー化させることにより、自身の境遇を正当化させる機能があると考えられた。

45. 性産業に従事することの意味 3 —インタビューアーへの影響の分析から—

宮島綾香（淑徳大学）・池田真弓（淑徳大学）・青木希美（淑徳大学）・中坪太一郎（淑徳大学）

性産業で働くということは、働いたことがない人にどのように映るのだろうか。本研究では、インタビューアーへの影響を分析することによって、性産業に従事することの意味を検討する事を目的とする。対象は性産業に従事する女性(以下 Info)にインタビューを行った女性(以下 Iv)で、約 35 分のインタビューデータから、グランデッド・セオリー・アプローチによる分析を行い、7 個のカテゴリーを生成した。その後、Iv への影響についてモデル作成と考察を行った。

性風俗に偏見はないと語っていた Iv だったが、仕事とプライベートに線引きがあってほしいという願望があったと考えられる。しかし、自己開示を用いるが線引きについての発言が成されず、自己に性産業に対する偏見があるとわかり、葛藤が生じたと考えられた。Iv にとって線引きは、性風俗に対して偏見を持ちたくなかったからこそ、自己開示をしてまで得たかった語りだったと考えられる。

46. 大学教育における「パーソナル・ライティング」導入の意義

谷美奈（帝塚山大学／京都大学大学院）

現在、多くの大学がレポートや論文の書き方といったアカデミック・ライティングに関する科目を設置している。これらの特徴は、専門学術的知識やスキルの提供など、教育上の有用性をねらいとして取り組んでいることにある。だが、そのために問題がテクニカルな意味における文章指導に限定されているとするならば、文章表現教育の現代的意義が見失われるおそれがある。「大学生の文章力低下」を追求すれば、〈自己〉と〈世界〉の双方にまたがる認識の起点というべき〈私〉がうまく機能していないこと、すなわち「学びの主体の未形成」という問題につきあたらざるをえない。

本発表では、この課題解決の有力な手掛かりとして、発表者が帝塚山大学（および前任校京都精華大学）で実践している、自己省察としての文章表現「パーソナル・ライティング」（エッセイ）の教育実践に着目する。さらにアメリカの大学における同種の教育実践についてもあわせて検討する。

47. SNS 利用における個人の心理的構造

菊地快（淑徳大学大学院）

インターネットの浸透により Social Networking Service(SNS)の利用者数も近年増加傾向にある。本論文の目的は SNS を利用する行動プロセスと、利用により得られる心理的影響を明らかにし、そこから SNS 利用者における心理的構造の仮説モデルを生成することである。

SNS 利用の始まりは現実の自己とマッチングされたアカウントの作成である。SNS 利用では現実の交友関係が反映されており、そのアカウントが SNS 利用の基点となる。そのため、SNS 上であっても実際の友人とのみの、閉じた交流を行う。

自己とマッチングされたアカウントの利用者は公的自己意識が強く、どのような内容を発言するかを気にするため、客観的な視点を持つ。それにより書き込み数が少なくなるようである。

SNS は円滑なコミュニケーションを行うための一助であり、現実の交友関係が基点となっているのである。その後更なる自己表現を行うために SNS 上で異なるアカウントを新たに作成し、自己表現を行う場を探索し続けるのである。

48. 院内ピアサポート活動が果たす役割と課題

鷹田佳典（早稲田大学）

本報告の目的は、関東にある小児総合病院（以下A病院）の血液腫瘍科で行われているピアサポート活動の役割と課題を、患者家族、病院スタッフ、ピアサポーターの三者の視点から検討することにある。このピアサポート活動は、小児がん経験者（かつて小児がんを罹患し、現在は治療を終えて社会生活を営んでいる方）の子どもを持つZ氏（女性）によって1998年から行われているもので、現在は毎週1回、A病院血液腫瘍科において、患児やその家族を支援するための様々な取り組みがなされている。本報告では、こうしたZ氏の活動が、患者家族と病棟スタッフの双方からどのように評価されているのか、また、Z氏がこうした活動にどのような思いや考えに基づいて取り組んでいるのかを明らかにし、A病院血液腫瘍科において院内ピアサポート活動が有する役割と課題について検討する。

49. ピア・レスポンス（Peer Response）における学習者の心理について—中国人留学生を中心に—

福岡寿美子（流通科学大学）

本学の日本語教育における作文の授業において、ピア・レスポンス（Peer Response）の実施を試みた。学習者は中国人を主としたアジア系留学生である。

先行研究においては、特に東アジア系の留学生は、これまで教師主導型の一斉授業を受けてきているので、ピア・レスポンスのような参加型、討論型の授業には馴染みがなく、ピア・レスポンスに対して、戸惑いや強い抵抗を感じる人が多いとある。

そこで、本研究では、「本当に中国人留学生をはじめとするアジア系留学生は、ピア・レスポンスに対して強い抵抗を感じているのか」を検証すべく、ピア・レスポンス実施におけるインタビューや振り返りシート等の質的データをもとに分析し、考察を行った。

その結果、先行研究に反して、中国人をはじめとするアジア系留学生のピア・レスポンスに対する「おもしろい」、「楽しい」、「もっとやりたい」等の心理が明らかになった。

50. 「生の意味」の実感とは—私とAの地平の違いから見えてきたもの—

中川公貴（京都大学）

本発表は、私が卒業論文の際に行った語り合い法（大倉、2008）という調査の記録を新たに考察し直したものである。卒論では、「自分の存在の意味」をどのように捉えているかというテーマについて、大学の友人Aに対し語り合い調査を行った。その際、他者や人間社会という「他」なるものが、人が「生の意味」を実感する際にいかなる重要性を持つのかを探ることを目指した。調査の結果、『他』へ貢献することで、自分の存在の意味は実現されるのだ」とどこか強迫的に考えていた私に対し、生きる意味を必ずしも「他」への貢献とは捉えず、むしろそれは自身が楽しむことにあると考えるAの、私との対比・地平の違いが浮かび上がった。そして語りの中で出た「義務」と「権利」という概念についても考察した結果、「自」と「他」を区別する見方は存在の意味について考える際に不十分なのではないか、ということが示唆された。

51. 会話の構成単位は隣接対か3つの発話の連なりかー会話データからの考察ー

町田佳世子（札幌市立大学）・河村奈美子（大分大学）

隣接対は、会話の構成単位として広く認められている。しかし、3つの発話の連なりを構成単位とする考え方もある。教室での、開始-応答-フォローアップという連鎖だけでなく、日常会話でも、隣接対の第2部分に続いて第3部分と言うべき発話が出現するケースは少なくない。

本研究は、録音し文字化した大人と小学校高学年の子ども、大人と大人の会話データ（各約6時間）を元に、第3部分の出現頻度や出現のコンテキストを観察した。その結果、大人と大人の会話では双方に第3部分の出現が顕著であり、第3部分が出現しない場合は、その多くが、第2部分の発話者が引き続き発話順番を維持するため、第3部分のスロットが生じていないことが見いだされた。大人と子どもの会話では、子どもが開始した連鎖（第3部分が子どものスロットとなる連なり）には第3部分がほとんど出現せず、第3部分の出現は語用論的成熟と関連する可能性が示唆された。

52. Days Before の視点から紡ぐ被災遺族の語りの研究

杉山高志（京都大学）・矢守克也（京都大学）

本研究は、被災前の日常、すなわち Days-Before の視点から、阪神淡路大震災で家族を亡くした被災遺族の語りを聞き取り、質的分析を行う研究である。現在、震災体験談の語りとして多くの手記が出版されているものの、それらの多くは震災直後から始まる語りである。震災を夢にも思わなかった穏やかな日々が震災前にあったはずなのにも関わらず、震災の語りの中で震災前の生活、すなわち Days-Before の視点から体験談が紡がれることは少ない現状である。そこで、本研究では阪神淡路大震災で家族を亡くした2名の被災遺族に対して、Days-Before の視点から体験談の聞き取り活動を行った。本研究の結果、震災以後およそ20年間、震災前の生活について一度も質問されたことがない事実が明らかになり、震災前に営まれていた日常が語りとして紡がれた。また、震災前の語りは「震災が無かったらありえたかもしれない日常」の語りも紡ぎ出し、それらの語りが現在の生活に対する新しい視点を作り出した。

53. 〈居場所〉はどのように達成されているか？

滝口克典（ぷらっとほーむ）

「不登校」「ひきこもり」など、生きづらさを抱える若者たちを支援する手法の一つに〈居場所〉の提供がある。先行研究によれば、〈居場所〉とは、「公共的な親密圏」あるいは「親密な公共空間」のことであり、そこでは、参加する人びとを場の内にとりこんでいく力（親密性）と、場の外に押し出していく力（公共性）という二種類の力が同時に働き、ゆるやかな包摂ややわらかな刺激が生成している。そうした場で過ごすことで、人びとは創傷した自己を修復し、外部に向かう動機を回復できるようになる、といわれている。では、そうした〈居場所〉の制御され縮減された他者性——「やわらかさ」「ゆるさ」「あいまいさ」——は、そこに関与する人びとのどのような取り組みのもとで可能となっているのであろうか。この問いを、発表者自身が実践者として関与する若者支援NPOの〈居場所づくり〉の実践事例に基づき、考察する。

54. 2型糖尿病患者と配偶者のコミュニケーションの変容過程

榊野健吾（広島大学）

糖尿病の罹患は増加の一途を辿っている。糖尿病の治療は、自己管理行動が必要である。自己管理行動は、家族支援と強い関連が報告されており、家族の重要性について述べられているが、一方で、「糖尿病警察」（Polonsky, 1999；石井訳, 2003）や「バックファイヤ」（Rook, August, Stephens, & Franks, 2011；Tucker & Anders, 2011）のように患者と家族の間に生じる問題が指摘されている。家族との生活の中で行われている自己管理行動は、患者と配偶者のコミュニケーションに影響していると考えられるが、その様態や変容についての研究は少ない。本研究では、栄養相談室に継続来談する成人期以降の2型糖尿病患者を対象に、栄養相談室の継続来談に当たり、①配偶者とどのようなコミュニケーションを行っているか、②そのコミュニケーションはどのように変容しているのかについて検討することを目的とした。半構造化面接を実施し、修正版グランテッド・セオリー・アプローチを用いて分析して検討する。

55. 「赤いカラス」における色覚異常を自覚させられる体験

鈴木聡志（東京農業大学）

小浜清志が1990年に発表した小説「赤いカラス」では、主人公の男性が二度、自身の色覚異常を自覚させられる。一度目は小学校5年生の時に眼科で色覚検査を受けた際に、二度目は高校生の時にダンスホールの緑色の壁が赤く見えた際に、主人公にとって後者は「衝撃」だった。二つの経験に関する記述を対比させることで、後者の経験がなぜ衝撃だったのかを考察する。

56. 小学校高学年担任教師の子ども観と実際の子どものかかわり

角家元（北海道教育大学大学院）・川島大輔（中京大学）・竹本克己（北海道教育大学大学院）

小学校高学年は、思春期の入口にあり、親や教師の指示・命令に対する無視や反抗が目立つようになる。また、大人との関係性よりも仲間集団からの承認を重視して、あえて大人に反抗することもある。他方で、思春期特有の悩みや不安が高まってくるのもこの時期である。そのため、教師は子どもの揺れ動く心の状態を理解した上で、子ども同士の関係性を見守るとともに、子どもに適切な助言を与えることが実践上重視されている。しかしながら、実際の指導は困難を伴うことが多く、高学年を担任することに不安をもつ教師も少なくない。本研究では、高学年指導の実践知を探索するため、以前学級崩壊を起こしたことの ある6学年にTTとして参与し、教師がどのような子ども観を抱きながら、子どもにかかわっているのかに迫った。観察記録と担任教師に対するインタビューの分析結果から、高学年指導の困難にあって「子どもとのかかわりを楽しむ」という実践知が見出された。

57. 子ども理解をめぐるエスノグラフィー—生徒指導困難校 A 中学校での実践を手がかりにして—

前川 洸（北海道教育大学大学院）・川島大輔（中京大学）・竹本克己（北海道教育大学大学院）

本研究は、「教師として子どもとどのように関わっていけば良いのか」という私自身の問いを出発点にして生徒指導困難校 A 中学校に参与した、教育実践におけるエスノグラフィーである。大学院実習生の立場で A 中 2 学年に参与し、生徒指導上の問題を多く抱えた子どもと積極的な関わりを持ちながら、参与観察やインフォーマルインタビューを行った。調査終了後、フィールドノーツをもとに KJ 法およびエピソード分類を行った結果、生徒指導における教職員の協働的な対応の他に、A 中生から感じられる雰囲気や、問題行動を頻繁に起こす子どもたちの様子を観察の焦点が絞られていることが分かった。また彼らの様子や私自身との関わりをつぶさに記録・観察する内に、自らの問いが「子どもの声を聴き、受け止める中で何ができるのか」という具体的なものへと変化した。当日は、こうした私自身の問いの変遷、つまり「子ども理解」の関心へと至ったプロセスを発表する。

58. 「病者」が「被験者」になってゆく過程

—臨床試験・治験の語りデータベース構築の取り組み(2)—

吉田幸恵（東京大学医科学研究所／立命館大学大学院先端総合学術研究科）

中田はる佳（東京大学大学院新領域創成科学研究科メディカルゲノム専攻／国立循環器病研究センター）

武藤香織（東京大学医科学研究所）

我々は、2012 年 4 月から「臨床試験・治験の語り」データベース・プロジェクトを遂行中である。臨床試験の主役である「被験者の体験」に注目した研究が数少ないことから、このプロジェクトでは被験者の経験を聞き取り、被験者が置かれた状況の理解を深める研究に活かすとともに、被験者保護の政策提言をも目的としている。昨年の本大会では、上記プロジェクトの背景及び取り組みと、「病いの語り」とは異なる、病者による「臨床試験の語り」の集積の独自の効果や、困難さに関して報告をおこなった。現在、インタビューは 20 名となり（2014 年 8 月現在）、「臨床試験の語り」の集積は進んでいる。今大会では、個別具体的な事例（当日提示）をもとに、病者が「臨床試験に参加する動機」を分析し、病者が「被験者」となってゆく過程に関しての報告をおこなう。

59. 小学 1 年の教室における教師の指示の使い分け

—ポライトネス理論による教師の権威性の顕れ方の検討—

川島哲（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC）

小学校において教師は授業内で必要な情報を共有するために、伝わるように話し、聞くことを児童に求めている。それは教師による指示として授業中に顕れるため、児童が話し合いやすい状況を作るように指示表現も使い分けられていると推測される。そこで、本研究では、児童に聴くよう求める発話を対象に、発話が行われた状況とともに考察した。結果、教師は児童同士が伝え合う状況においては、児童のフェイスへの配慮を付加した丁寧な発話を行っていた。一方で、教師に注目を集め、発話しようとする状況においては、一般に児童同士で聴き合う状況より厳しい表現を用いていた。このことから、教師が児童の注目を集める状況では、教師は自らを児童らより権威のある存在として示し、児童同士で聴き合う状況では、その妨げとならないよう権威性を顕わにしないという方略で教室内の関係性を調整し、話を伝えあうことができるよう工夫していることが示唆された。

60. 乗馬プログラムの後に A 君の描きたいという気持ちを支えたものは何か

河村奈美子（大分大学）

乗馬は海外では身体的にも精神的にも治療に用いられており、リハビリ効果や心理的効果も大きいことについて示されている。しかし、効果の心理的側面については、さほど明確にはされていなく、事例を詳細に振り返るなどの効果につながるプロセスを読み取ることが重要となる。

大きな馬を囲んでみんなで手入れをしたり、順番に馬に乗ったり、えさをやったりする活動は、子どもたちに人気である。そこで、児童発達支援センターの主に未就学の子どもの活動に乗馬プログラムを取り入れて実施した。乗馬プログラムに参加し、保護者と本人から研究協力に同意の得られた子どもの中から、A 君の事例について検討する。

乗馬プログラムは2回実施し、午前は馬と関わり、午後は「馬と私」というテーマで絵を描く時間を設定した。自閉症と AD/HD の診断を受けている A 君は、馬を楽しみにしていたものの、触れることはできず、馬のブラシは初回に触れたのみであった。乗馬プログラムへの参加については「楽しかったか？」にうなづく反応を示した。普段から考えたり想像して描くことを苦手とする A 君が、乗馬後の絵画の初回では、まったく描けず部屋の隅に座ってすごしたのだが、2回目は2つの目と2つの鼻の穴を描くことができ、A 君も納得した。A 君が描けないところから描きたい、描くという気持ちを支えたものは何であったのかについて乗馬の時間の記録をたどって考えたい。

61. 障がい児家族の変容プロセス（M 家の場合）― 障がいの変化と家族役割 ―

渡邊文春（松山大学大学院）

本研究の目的は、「障がいを持つ子ども」とその家族の相互関係を明らかにすることである。今回の当事者 M さんは、プラダー・ウィリー症候群という障がいがある。M さんの誕生から現在までの様子を、M さんの母親と長女にインタビューを行い、その内容を春日キスヨ(春日 2001) の障がい児家族内関係と比較してみる。

①「心身両面の能力の障がいの大きさ」によって規定される側面。M さんが乳児期的には重度障がい、家族介助が中心となる。それから、幼児期に脊髄がしっかりして身体的に軽度障がいとなり、母親は M さんの療育活動への送迎が中心役割となった。

②「障がいを持つ子どもへのスティグマ視」の側面。M さんが生まれた頃には、父親と長女の M さんへの家族役割が確認された。しかし現在では、M さんの障がいについては、母親以外の他の家族成員には無関心となっている。そこで M さんと家族の関係が、「母親の深い関係」と「その他の家族の浅い関係」が違和感なく成立している。

62. 看護教師の力量形成過程とその促進要因に関する研究

石塚淳子（順天堂大学）・佐々木史乃（順天堂大学）・佐藤道子（岐阜聖徳学園大学）

看護系大学・学部急増とともに看護教員の不足が大きな問題となっている。新設大学・学部などでは十分な看護教員を確保することができず、また看護教員になったとしても、数年で離職するケースも問題となってきた。研究者は数年前より看護教師を対象にライフコースアプローチの手法で看護教師の力量形成に関する研究を行ってきた。本研究では3名の熟練看護教師へのインタビューを通して、看護教師としての職業継続を支える要因を明らかにしたので、その結果を報告する。

63. 高齢者福祉介護施設における音楽活動のエスノグラフィー音楽が広げるコミュニケーション

宮地均三代（立命館大学）

本研究では、フィールドワーク（参与観察）を行い、エスノグラフィの記述を用いることで、デイサービスにおける音楽活動の定着過程と、音楽の本質である時間の経過による変化プロセスを記述することを目的とした。分析の結果、第一に、音楽活動は職員による補完により音楽活動が円滑に機能するようサポートされており、フィールド定着過程において、高齢者—職員—実施者の三者の関係性が変化していくことが明らかになった。第二に、音楽活動を継続する中で高齢者の活動への参与姿勢の積極性が高まったことが示唆された。特に、活動の後半には高齢者の経験や思い出に基づく自発的な語りが見られた。本研究では、三者の関係性が変化して音楽がフィールドに定着するプロセスが明らかになり、単なる音楽活動の実践でも音楽がフィールドにもたらすものが存在するということが示唆された。

64. 1 年間における小学校教師の経営行動の変化

笹屋孝允（東京大学大学院）

本研究の目的は、小学校の教師が授業中の経営行動を 1 年間でどのように変化させていくのか、話しの聞き方に関する「授業ルール」の扱いに着目して分析し、経営行動の変化の特徴と要因を明らかにすることである。そのために、筆者が過去に担任した 4 年生の 1 学級における 1 年間の授業の映像記録と 1 年間で作成された文字記録から、授業中の話しの聞き方に関する教師の指導と子どもの聞く行動を抽出し、1 年間で 4 期に分けそれぞれの時期の特徴を分析した。その結果、年度当初は全員の子どもに一律に同じ行動をとるよう教師が要請すること、ほとんどの子どもたちが授業ルールに適応し、かつ、教師が子どもの特性を理解する時期になると次第に子どもの特性に合わせて子どもごとに要請する行動が変化することが明らかとなった。また、その要因として、教師の授業観や年度当初に設定した目標と教室の現状との比較による日々の目標設定があることが示唆された。

65. 東日本大震災を契機に九州北部での生活を始めた乳幼児と親たち

松永妃都美（佐賀大学）・新地浩一（佐賀大学）

本研究の目的は、災害を契機に被災地を離れた乳幼児家族の行動や思考、感情の時間的変化を、社会的・文化的な文脈の中で描写し、避難者が「避難生活」から「自立した生活」に移行する為に必要な支援や資源、連携、施策を検討することである。分析には、TEAを用いた。研究対象者は、東日本大震災を契機として乳幼児と自主的に広域避難し、九州北部での生活を継続している保護者である。調査は平成 26 年 5 月より開始した。面接対象者の選出および継続面接、分析は今なお継続中である。本発表では、現在までに 1・2 回の半構造化面接が終了した広域避難者の人生の軌跡から今後の課題および展望を報告する。

66. 中途診断からの自己認識の変遷—発達障害と診断された当事者の語りから

平野郁子（北海道大学大学院教育学院）

昨年の DSM の改訂で、広汎性発達障害に変わり自閉症スペクトラム障害が創設され、改めて診断の意義が問われている。診断によって当事者は生きにくさの原因がわかり安堵するが、本人と環境の双方が障害として受容し合うことは難しい。背景には障害が見た目にわかりにくく、定型発達と明確な線引きが難しく、中途診断されるという特有の事情が窺える。本研究の目的は、診断後の発達障害に対する自己認識の変遷を聴き取り調査から明らかにすることである。協力者は診断前後で疑念を抱き、診断名への漠然としたわからなさから書籍等で調べて答え合わせし、当事者同士の交流から体験的理解を深める中で、障害を開示した方が生きやすいと認識するに至っていた。自己認識の変遷には、困難さを持ちながら社会でどう生きるかという問題意識を背景に、自己の連続性を保ち社会で生きていくための戦略を直面する場面に応じて選択するという側面があると考えられた。

67. グループ回想法における高齢者の語りの質的検討（Ⅲ）

野村信威（明治学院大学心理学部）

本研究は、グループ回想法での効果例と非効果例の語りの比較を通して、どのような過去の語りが回想法の心理的効果を導くのかという回想法の効果における仮説生成を行うことを目的とした。野村・橋本（2006）による研究の参加者に対してクラスター分析を行った結果、主に 13 名の効果例と 7 名の非効果例の 2 つのクラスターが認められた。そのうちより多くのエピソードを語っている者を効果例と非効果例としてそれぞれ 3 名ずつ選出し、語りの内容の比較検討を行った。その結果、効果例の者に共通する特徴として、繰り返し彼らが語りたいと考える回想のテーマをもっていること、回想の過程で特定のテーマが立ち現れること、肉親の死を詳細に語ることがカタルシスを生み出す可能性などが考えられた。その一方、非効果例の 3 名には共通した特徴はほとんど認められなかった。しかしながら非効果例の者には「回想へのとまどい」という共通点があると考えられた。

68. 中学校での指導を支える共感的生徒理解とジレンマある中学校教師へのインタビューから—

富岡拓斗(北海道教育大学大学院)・川島大輔(中京大学)・竹本克己(北海道教育大学大学院)

いじめ等の生徒指導上の問題を多数抱える教育現場に対し、心豊かに生きる子どもの育成が社会的にも求められている。これまでの現場経験から、私は「生徒の心の内をどれだけ共感的に理解できるか」が自らの教育実践における喫緊の課題であると考えた。本研究では、共感的な生徒理解の意義と実際を探ることを目的として、北海道 A 市内の中学校に勤務する O 教諭を対象にインタビュー調査を実施した。O 教諭は調査当時、生徒指導部長を勤めており、教員経験 20 年目程度の中堅教諭である。上述の目的に沿ったインタビューガイドを作成し、半構造化インタビューを実施した。得られた結果は、KJ 法（川喜田,1967）を用いて分析した。結果、O 教諭が指導上で大切にしている教育観や指導観、人間観と共感的生徒理解との密接な関係性が見出された。同時に、共感的な生徒理解と教育活動上のジレンマも垣間見え、このジレンマも含めて O 教諭の指導を支えていることがうかがえた。

69. 障がい児（者）の母親がきょうだいのキャリア選択に与える影響

—母子間の思いの共通性とズレに着目して—

渡邊照美（佛教大学）・菅原伸康（佛教大学）

家族は、お互いがそれぞれに影響を与えながら、「家族」を生き、「個」を生きているといえよう。それは障がい児（者）家族でも同様である。障がい児（者）が家族にいることは、父親や母親に影響を与えるだけでなく、きょうだいにも大きな影響を与えているに違いない。

そこで、本研究では、障がい児（者）に対する母親の考えと障がい児（者）のきょうだいに対する母親の考えについて、明らかにすることを第1の目的とした。次に、きょうだい障がいのあるきょうだいのことをどのように捉え、自分自身のキャリアについて、どのように考えているのかという点について明らかにすることを第2の目的とした。その上で、母子間での思いの共通性とズレを検討することを第3の目的とした。その際の分析の視点として、母子間での障がい児（者）をめぐる思いと、母親の望むきょうだいのキャリアについてときょうだい自身の望むキャリアの2つを設定し分析を行った。

70. 認知症との会話に対する認識の転換—困難性や能力の低下から発揮へ—

田中元基(淑徳大学大学院)

認知症ケアにおいて、介護者をはじめとする認知症でない者が認知症者をどのように認識しているかが重要であると考えられている。介護者の認識が、認知症者に対する態度や関わり方に影響すると先行研究から示唆されてきたためである。本発表では、従来、能力の低下や困難性について言及されることの多い認知症者の会話行為に着目し、低下などと異なる側面から説明することを試みる。方法は、認知症者の会話の中から、同様の話題の語られた場面を対象に、会話分析・ディスコース分析を用いて分析を行った。その結果、認知症者の発話は、会話内容として矛盾や理解困難な場合も多くあった。しかし、会話相手を含めて分析すると、認知症者が会話形式において会話相手へ配慮した発話を行っている等の特徴も見出された。会話相手を含めて会話を捉えることで、会話行為は、低下や困難と異なる、能力の発揮としても認識可能であると考えられた。

71. 音楽アウトリーチ実践における「発達の最近接領域」構築過程の縦断的検討

新原将義（筑波大学大学院）・大澤愛（第一学院専門カレッジ）

子供の音楽的発達研究において、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域（以下 ZPD）」概念の適用を試みた研究が散見される（e.g., de Vries, 2005; Kim, 2000）。このような潮流は、音楽の学習や発達を個人の能力からだけでなく、他者とのやり取りも視野に入れて捉える重要な試みであると評価できる。しかし反面、これらの知見の関心は個々人の発達や学習に他者の支援がいかに影響するかという図式に限定されている。対して近年の社会・文化的アプローチでは、ZPD は「協働実践の集合的達成」（Holzman, 2009）として再解釈されており、活動や発達そのものの意味が相互作用の中でいかに形成されるかという観点が重要であるといえる。本研究ではこのような観点から、プロの音楽家と保育士の協働によるアウトリーチ実践において、音楽家と保育士が活動をいかに構築したかを縦断的に検討する。

72. 聴覚障害幼児のことばの育ちを促すやりとり

—教師 - 子ども間のコミュニケーションの変容と応答性—

三浦麻依子（北海道教育大学大学院）・川島大輔（中京大学）・竹本克己（北海道教育大学大学院）

聴覚障害乳幼児のことばの育ちには、情動的関係にある大人とのやりとりが影響すると言われる。しかし、ことばの表現や理解の未熟さから、子どもとのやりとりに不安を抱える保護者もあり、実際のやりとりに困難を伴うことも多い。ここから、ことばの育ちを促す支援には、教師—子ども間のやりとりが重要な役割を担っており、とくにコミュニケーション発達の初期段階では、教師の共感的応答が重要な意味をもつと言える。しかし、子どもとのやりとりの実際やことばの育ちに効果的な教師の応答、その発達変化のプロセスにはいまだ不明瞭な部分が多い。

そこで本研究では、教育実践と平行させながら、教師—子ども間のコミュニケーションの質的变化、ならびに子どもの表出語彙の変容を追った。当日は、参与観察を通して得たエピソード記録から、教師とのコミュニケーションを足場に人間関係や自身のことばを広げていった子どもの発達の軌跡を報告する。

73. 津波減災のアクションリサーチ——個別避難訓練の実践から

孫英英（京都大学防災研究所・日本学術振興会特別研究員）・矢守克也（京都大学防災研究所）

・谷澤亮也（京都大学情報学研究科）

住民の能動性を引き出そうとして実践された参加型の防災活動が、かえって住民の行動をパターンリスティックに過度にコントロールしようとする行政や専門家と、自らの安全について過度に依存する住民という、過保護と過依存の関係を再生産してしまう場合がある。東日本大震災後、南海トラフの地震・津波による被害が想定される地域では、住民側の能動性が強く求められる津波防災に対して、いかにアプローチするかが大きな課題となっている。本研究では、高知県四万十町興津地区において、津波避難の担い手である住民に防災の主役を任せ、個別具体的に問題を解決するための「個別避難訓練」を提案した。その活動のポイントは、「主体性の回復」、「支援者の再発見」、「協働作業」の3点である。そのプロセスにおいて、訓練参加者と支援者の間には、能動性と受動性という二重の構造が形成された。本研究はこの二重構造の意味について検討を行う。

74. 助産師—妊婦—胎児間のインタラクションの構造的分析

西川みゆき（京都光華女子大学）・鮫島輝美（京都光華女子大学）

【目的】本研究では、状況論的アプローチを採用し、地域の助産師が妊婦に『触れる』ことで促進される妊婦や家族とのインタラクションを丁寧に描き出すことで、助産師の「触れる」ことの意味を構造的に明らかにすることを目的とする。

【方法】妊婦2名に対し、平成25年8月～平成26年3月にかけて、妊婦健康診査での参与観察および半構造的インタビュー調査を実施した。

倫理的配慮として、京都光華女子大学研究倫理審査にて、承認済である。（承認番号05）

【結果・考察】妊婦健康診査で、毎回映し出される胎児画像の児の成長や日々の児の動きの変化から、子どもの特性を見出しており、これらが「まだ見ぬわが子」への愛着へとつながっていた。妊婦は、まだ生まれていない児に対し「うちの子ね。」と表現をしており、新たな自己の価値を獲得することで、母親としての自信と誇りを身につけている様子が伺えた。

75. 「Survivor Shame」試論－自らの震災体験を振り返る－

鮫島輝美（京都光華女子大学）

鷺田（2012）は、東日本大震災を機に、19 年前の阪神・淡路大震災に襲われた被災者の中にもフラッシュバックを経験した者について、「からだは忘れていなかった」と指摘している。私自身もその一人であり、今まで語ろうとしてこなかった震災体験を、今だからこそ語らなければいけない、という思いに襲われている。「『語りなおし』とは、自分のこれまでの経験をこれまでとは違う糸で縫いなおすこと（鷺田，2012）」であり、「針のその一刺し一刺し」によって痛みを伴う。それでも、語りなおすことに意味があると考えている。今回は、” Survivor Guilt” から Survivor Shame” という新しい軸を検討したい。Survivor Guilt とは、生き残った人間が、生き残ったことに罪悪感を感じるのだが、これには違和感があり、むしろ生き残ったことを「恥ずかしい(shame)」と覚えることについて議論したい。

76. 山村留学校における足場作り ―連携を通した生徒のリソース探し―

棚瀬泰宏（北海道教育大学大学院）・川島大輔（中京大学）・竹本克己（北海道教育大学大学院）

山村留学は、山村の学校で生活する中で、都市部では経験できない体験を行うことに特徴がある。しかし自然環境に憧れて留学する生徒が以前は多かったものの、今日では非行やいじめ、不登校などの事情から山村留学に救いを求め、悩みや課題を克服しようとするケースが増えている。山村に留学する生徒の多くが悩みを抱えているのであれば、教師が課題の克服ばかりに焦点を置いて生徒に関わるのではなく、彼らが主体として学校で生活するための発達の援助が必要不可欠である。

そこで本研究では、山村留学校の教師として参与し、生徒一人一人のリソースに目を凝らし、教職員、地域、保護者等の間で連携を図っていくことを実践の目的とした。現場で得た記録から、教師が、生徒の変化を追いながら生徒のリソースを見出していくことの重要性を提起したい。

77. 退職教員が捉える退職の意味と生活課題の検討

中本友梨（立命館大学）

日本は世界を代表する超高齢化社会である。超高齢化社会の中では高齢者をとりまく様々な問題が存在し、関心を集めている。本研究では、高齢者におけるストレスの一つであり、様々な喪失や変化を伴う「退職」というライフイベントを扱った。地方退職教員 8 名を対象としたインタビュー調査から、彼らが捉える退職の意味と生活課題を検討することを目的とした研究である。

調査の結果、経済的な余裕や地域特性から本研究協力者にとって「退職」はポジティブなライフイベントとして捉えられていた。また、退職後数年経過し老いを感じると同時に生活課題について考え始めるようであった。協力者は老いに関して不安を抱く一方で、「子ども達など他者に迷惑をかけずに生きていきたい」という理想を持ち、自立して生活することを目標としていた。

78. 〈喪失の語り〉におけるアイデンティティの深化のプロセス

—がんで配偶者を亡くした人たちの死別と再生の物語—

駒澤真由美（神戸松蔭女子学院大学大学院）・大和田攝子（神戸松蔭女子学院大学）

・黒丸尊治（彦根市立病院）

これまで日本において〈喪失の語り〉におけるアイデンティティの深化に焦点をあてた悲嘆プロセスの研究は、ほとんどなされていない。本研究では、がんで配偶者を亡くした人たちの〈喪失の語り〉を同じ経験を持つ研究者が語り手と聴き手の関係の上で意味づけられ再構成される物語として聴くことで、死別体験の遺族のアイデンティティへの影響と、人生の意味づけの変化、故人のいない新しい世界に適応する過程、について理解し考察することを目的とした。遺族 10 名に対してライフストーリー・インタビューを実施し、ナラティブ・テキストの分析を行った結果、その悲嘆プロセスは、故人との愛着関係において【両価型探求志向】【回避型受容志向】【囚われ型喪失志向】【安定型回復志向】の 4 つのタイプに分類できると思われた。が、しかし、…。本発表では、上記内容について研究者が当事者であることの語りへの影響も交えながら報告する。

79. 「当事者研究」の視点からみる災害復興過程の実践—「クロスロード：大洗編」の開発を例に—

李勇昕（京都大学情報学研究科）・宮本匠（京都大学防災研究所）・矢守克也（京都大学防災研究所）

東日本大震災では、深刻な風評被害を抱える被災地が少なくない。風評被害は、その動向が、マスメディアや被災地外の人びとの言説や行動によって左右されるために、肝心の被災地が「自分たちの力ではどうしようもない」という疎外状況に置かれ、問題解決に向けた主体的な関わりを失いがちである。本発表は、茨城県大洗町をフィールドとして、住民が自分の震災体験に基づいて防災ゲーム「クロスロード」の設問と体験語りの動画を作成し、それを活用したワークショップを通して問題解消にアプローチした成果と課題について、「当事者研究」のフレームを用いて考察する。その結果、住民が自らの葛藤や悩みを設問という形で可視化できた点、また、「クロスロード」が、町民同士で大洗の課題について語り合いのための媒体となり、住民が風評被害を受動的に被るだけの存在ではなく、積極的にそれについて表現し解消に取り組む能動的主体となりうることがわかった。

80. 若年母親・父親及びその家族が持つ子どもへの思いとその変化

—複線径路・等至性モデルを用いた類型化—

大川聡子（大阪府立大学看護学部）

若年母親の特徴を踏まえた支援のあり方について検討することを目的に、若年母親 25 名に対しインタビュー調査を行なった。本報告では、若年母親・父親及びその家族が持つ子どもへの思いとその変化について示す。インタビューデータは質的記述的分析を行ない、コード化、カテゴリー化した。コードやカテゴリーの中から若年母親の出産への選択に影響を及ぼすと考えられた出来事や社会的背景を抽出し、複線径路・等至性モデル（TEM）図を作成した。作成した TEM 図から、若年母親が妊娠から出産に至るまでの径路を、妊娠発覚後の母親・父親・家族の子どもへの思いに焦点を当て、1. 計画された妊娠型、2. 妊娠をきっかけに結婚型、3. 予期せぬ妊娠後シングルで出産型、4. 追い込まれ出産型の 4 つに類型化した。母親が出産に消極的でパートナーが積極的というタイプは、今回の調査では見られなかった。調査結果を踏まえて、タイプ別の支援のあり方について考察する。

81. 母体・胎児集中治療室に入院したハイリスク妊婦の QOL 評価

西方真弓（新潟大学）・田中美央（新潟大学）・菊永淳（新潟大学）・宮坂道夫（新潟大学）

母体・胎児集中治療室（MFICU）では、母体・胎児の医学的管理による妊娠の継続が最優先となりがちである。そのためハイリスク妊婦の心身への健康面や環境調整、母親役割の獲得に向けた支援が十分とは言えず、安全性と快適性に配慮した入院生活の支援や、妊娠中の生活の質（QOL）の維持・向上に結びつく具体的な支援の方法は明らかになっていない。本研究では、MFICU に入院したハイリスク妊婦 15 名を対象に、個人の生活の質評価法（SEIQoL-DW）による QOL 評価と半構造化面接を行った。その結果、ハイリスク妊婦の QOL の重要な構成分野（Cue）を「家族」「赤ちゃんの成長・発達」「食事」「清潔・美容」「趣味・余暇」等のカテゴリーに分類することができた。本法による分析は、ハイリスク妊婦が入院生活の中で気にかけていることや重視していること等を把握でき、支援のあり方を改善するための一助になると考えられる。

82. 英語を母語とする中級日本語学習者のパソコンによる作文過程

—外部リソースの使用の観点から—

石毛順子（国際教養大学）

本研究は英語を母語とする中級日本語学習者の PC を用いた作文過程での活動を、特に辞書等の外部リソースの使用について明らかにすることを目的とした。先行研究では中国語を母語とする中級・上級の日本語学習者の PC での作文過程の外部リソースの使用において、手書きの作文過程では見られなかった活動が 6 つ示されている。これらの活動と比較し、英語母語話者の特徴を探った。その結果、英語母語話者に特有の外部リソース利用として「google の検索窓に直接英語の語句を入力する」「google の検索窓に直接英語の語句と “in Japanese” や “how to say” を同時に入力し、表示された辞書サイトや wikipedia で語句の日本語訳を調べる」というものを見出した。中国語母語話者で見られた、漢字の読み方を示す google アプリの使用や、母語で考えた文を google 翻訳で日本語に翻訳する活動は見られなかった。

83. 語りにおける時制の影響について

横山克貴（東京大学）

本研究は、人が経験を語る際に、その時制を変えることが、語りや語り手の認知に与える影響について検討するものです。トラウマ経験の語りにおいて、感情的に高まる場面の語りでは、自然に過去形の語りから現在形の語りへシフトするといったことが報告されていることや、PTSD 治療において語り手に現在形でのトラウマ記憶の語りを促す持続エクスポージャー療法があることなどから、語り手の認知と時制には何らかの関係があることが考えられます。本研究では、研究協力者に、現在形の語りと過去形の語りを促し、その後、各語りが語り手にどう体験されたかインタビューを行います。主観的体験と実際に得られたテキストの分析の 2 点においてその比較を行うことで、語りと時制との関係について研究を行い、その研究経過について発表いたします。

84. 育成年代サッカーコーチ（指導者）のライフストーリー研究

原仲碧（筑波大学大学院）・森政憲（筑波大学大学院）・小井土正亮（筑波大学体育系）

・中山雅雄（筑波大学体育系）・浅井武（筑波大学体育系）

本研究では、日本の育成年代サッカーコーチ（指導者）のコーチング観（指導観）について、質的研究法であるライフストーリーを用い検討し、詳細な記述から、コーチングという言説の再定位を試みた。対象は、Jリーグアカデミーでコーチとして選手育成に携わる2名のプロフェッショナルコーチとした。2名のコーチは選手として10年以上のプロ経験を有する、いわゆる熟達者であった。これまでのサッカーに関わる経験について、半構造化されたインタビューから、ライフストーリーを語ってもらい、語りを再構成した結果、コーチは過去の経験から学び、「省察（せいさつ）的思考による受容」を基に「有機的改善の継続」によってコーチとしての熟達化に向けた取組みを日々実践することの重要性が新たに提示された。このことから、コーチングという言説は「コーチがコーチング実践によって自らを成長させる営みである」と、従来とは異なる視点によって再定位された。

85. 子どもの障害を受容することと心理社会的に適応すること

林田政弘（東大阪市療育センター）・横井 輝夫（大阪行岡医療大学）

個人に受けいれを促す障害受容は、援助的意味をなさないどころか害悪であるとの批判がある（南雲 1998）。障害者が状況に合わせて生活を変えていくための援助ケアをさす場合、障害への心理社会的適応という概念が用いられる（細田 2009）。障害受容は価値転換を前提としている（Wright 1960）。本研究では、複線径路・等至性モデル（TEM）を援用し、高等部2年の重症心身障害児者を育てる3名の母へのインタビューを通して、障害受容と障害への心理社会的適応の関係を可視化した。その結果、①障害への心理社会的適応には、障害受容の根幹である価値転換を必ずしも必要とはしなかった。②「今の生活が幸せ」と感じる等至点にたどりつくまでに、数個の必須通過点がみられた。③この幸福感にたどりつく前に他者への感謝が存在した。④「今の生活が幸せ」と感じる等至点の後、関心が他者（今、苦しむ若い母）に向かう人がいた。

86. 学生ボランティアと被災地の人々との関係性から見た復興活動の変容

—宮城県東松島市東名地区の事例を通して—

蔡 倩如（茨城大学人文科学研究科）

2011年3月11日、後に東日本大震災と呼ばれる大震災が発生した。この震災後、茨城大学で学生たちが自ら立ち上げた震災ボランティア団体が被災地に行き、復興支援活動を継続的に行ってきている。中国人留学生である筆者は、この茨城大学東北ボランティア団体に加入し、学生たちの活動に参加しつつ記録をしている。

本研究では、宮城県東松島市東名地区における学生ボランティアと被災地の人々との関係性がどう変わっていったのか、そしてそれにもなあって復興活動がどう変容したのかということを、参与観察及び関係者へのインタビューを通して明らかにする。

これまでの調査から、学生たちの活動と被災地の人々の思惑には「ズレ」があることが見える。その「ズレ」に学生たちが気づいていくことが、今後の学生ボランティア活動と被災地の復興現状をさらにかみ合わせ、被災地の人々の考えも大切に、より効果的な活動を展開していく鍵になることがうかがわれた。

87. 透析患者の便秘に関する生活側面からの考察

一人暮らしの男性高齢患者の会話分析－

石井俊行(四国大学看護学部)

【目的】本研究では、一人暮らしの高齢男性透析患者の生活側面に便秘がどのような影響しているのか、便秘への工夫、思いについて明らかにすることを目的とした。

【方法】A県B病院に外来通院するC氏 70 歳代男性にインタビューを実施、会話分析の方法を用いて分析した。

【倫理的配慮】B病院の倫理委員会の承認を得て実施した。C氏に対して、目的、方法、個人が特定されない旨等文書を使用して説明し同意を得た。

【結果・考察】C氏に対して、緩下剤(センノシド 2 錠)が就寝前に処方されている。便秘に効果があるとされる食材、食事面の工夫は実施しておらず、スーパーの惣菜類を利用し、便が出ていない、腹部の張った感じなどの自覚症状から緩下剤を服薬していた。C氏は食事面、運動、排便習慣など便秘改善につながる生活上の工夫は行わず、便秘対策は緩下剤のみが頼りで、透析治療中であっても排便があれば良いと願う思いが明らかとなった。

住友彰文 監修・村井 源 編
量から質に迫る
 人間の複雑な感性をいかに「計る」か
 A5判上製240頁／2600円＋税

スーザン・ハロウェイ 著／
 高橋 登・清水民子・瓜生淑子 訳
少子化時代の「良妻賢母」
 変容する現代日本の女性と家族
 四六半製400頁／3700円＋税

森口佑介 著
おさなごころを科学する
 進化する乳幼児観
 四六半製320頁／2400円＋税

子安増生・仲真紀子 編著
こころが育つ環境をつくる
 発達心理学からの提言
 四六半製288頁／2300円＋税

日本質的心理学会 編
質的心理学研究 第13号
 特集「個性」の質的研究
 B5判並製280頁／3200円＋税



質的心理学フォーラム選書
 斎藤清一・山田富秋・本山方子 編
1 インタビューという実践
 インタビュー実践者は、研究・臨床の現場でどんな問題にふつかり、
 素り越えようとしているのか。質的心理心理学「フォーラム」誌上で交
 わされた対話の記録。学会と読者を繋ぎ、質的研究の地平を拓
 く！
 四六半製216頁／1800円＋税

川野健治・ハッ塚一郎・本山方子 編
2 物語りと共約幻想
 「人理解しあえるはずだ」「理解をめざすべきだ」という願望と「理
 解には困難がつきまとう」という現実。相手の語りに基づき、自
 分の考えや思い込みが相違から導かれる経験からの構築。
 四六半製192頁／1700円＋税

戈木クレイタヒル 滋子 編著
グラフィック・セオリー・アプローチを用いたデータ収集法
 良いデータをどう収集するか？ リサーチ・クエスチョンの設定、
 データ収集の特徴と手順、勘所は？ 著者のトレーニングゼミの
 講義を再現しながら、事例データに基づいて具体的な・実践的に学
 ぶ！
 A5判並製208頁／2100円＋税

株式会社
新曜社

〒101-0061 東京都千代田区神田神保町3-9 第一丸三ビル
 TEL: 03-3264-4873 (代) FAX: 03-3238-2958 (表示価格は本体価格)
 E-mail: info@shin-yo-sha.co.jp URL: http://www.shin-yo-sha.co.jp/



本書は、過去25年間の主要な研究文献を全5巻に収録し、質的心理学の全体像を提供するものです。質的心理学の発展と傾向を理解しやすいよう、第1巻の「Foundations」から第5巻の「Contemporary issues and innovations」まで、年代順に構成されています。心理学、なかでも定性調査法に関心のある研究者および図書館、関連機関にとって、決定版レファレンスとしておすすめいたします。

Volume 1: Foundations / Volume 2: Qualitative data collection / Volume 3: Methodologies 1: From experiential to constructionist approaches / Volume 4: Methodologies 2: Discursive and critical approaches / Volume 5: Contemporary issues and innovations

心理学における定量調査法 全5巻

Quantitative Research in Psychology

Five-Volume Set

Edited by Jeremy Miles (RAND Corporation), Brian Stucky (RAND Corporation)

SAGE Benchmarks in Psychology series
Dec-2014 • 1,888 pages ISBN: 9781446282670

定価: £825.00 ※刊行前定価: £750.00



本書は、古典的なものから最新のものまで、量的心理学に関する主要な研究論文を全5巻にまとめたものです。最も基礎的であり最も広く研究されている量的心理学の領域において、確立された理論がどのように発展し続けているのかを示します。各巻には、それぞれのテーマを文脈付けることができるように、編者によるイントロダクションが収録されています。量的心理学の研究者および、図書館、量的心理学の調査法を使用する専門機関にとって、欠かせないレファレンスとしておすすめいたします。

Volume 1: Statistical hypothesis testing and power / Volume 2: Measurement / Volume 3: Research Design and sampling / Volume 4: Statistical Tests / Volume 5: Complex Models



※ご注文は各洋書取扱書店までお願いいたします。
※商品の価格は改定・変更する可能性があります。あらかじめご了承ください。

◆内容のお問い合わせ: セイジ・パブリケーションズ 日本支社

Email: sageinfo@sagepub.co.uk Website: www.sagepub.co.uk

バイオサイコソーシャルアプローチ

渡辺俊之、小森康永著「生物・心理・社会モデル」をこれからの臨床のために磨き上げる。知ってるつもりのBPSの本質と広がり。 3,400円

ナラティヴ・ブラクティス

M・ホワイト著／小森康永、奥野 光訳
ナラティヴ・セラピーの創設者であるマイ
ケル・ホワイトの未発表原稿11本を収録し
た遺稿集。 3,800円

精神医療・診断の手引き

大野 裕著 DSM-IIIが成立する背景からDSM-5の作成をめくっての「批判」を紹介しながら、著者の精神科医療への思いを綴る。 2,400円

Ψ 金剛出版

〒112-0005 東京都文京区水道1-5-16
Tel. 03-3815-6661 Fax 03-3818-6848 e-

*価格は税抜表示です
dress : kongo@kongo

luppa.co.jp

リスパツク 有元豊
耳を傾ける技術

グローバル化する世界の中で聞きとられずに消えていく様々な声。都市社会学、人類学、民族学の視点から言語はロンドンにおける多文化状況を鑑く分析し「耳を傾ける技術としての社会学」を提唱する（斎藤／小笠原博樹）。

Abstract

語りが拓く地平

ライフストーリー研究の起源と現在——シカゴ学派と中野卓の生涯史研究まで遡りながら人々が語るというオラトリイの行爲を相互行爲の文脈において捉える対話的構想主義の新たな可能性を探究する。

Abstract

メディアの境界

電子と陽子の急速な移動の中で、紙の本を取り囲む環境はがらりと変わった。紙が電子か——この不毛な「書式」に陥らず、臨界状態にある現在の「電子」の可能性を新たな視点から問い直す。

11-22244

村原静一 節内臣久保正統

映像人類学

シホする台本は、吾人類学、ジャン・ド・シホの著述に、實際したアイデアは、今と異ならぬ。——民族誌、映画の歴史と現在を踏まえ、映像による新たな人類学を实践していくための重要な土台を提供する。

RESEARCH

T1D6-0184 東京電子代田区豊島町1-3-13大井ビル **せりか書房** Tel 03-5331-4876 <http://www.serika.co.jp/>

心理学書 1
思いやりはどこから来るの？
日本心理学会賞/高木 繁・竹村和久著【発達
性の心理と行動】思いやりがビジネスを動かす
仕組みなど、面白いトピックスが満載。2000円



心理学書 2
なつかしさの心理学
日本心理学会賞/前見 卓著【思いやりと感情】
なつかしさ感情の不思議と能力を、認知、記憶、意
識などより具体的な研究に基づいて解説。1700円



心理学のための統計学 1
心理学のための統計学入門
川崎一夫・佐藤宏二郎著【マクロのデータ分析】
様々な統計手法を学んでいくための基礎的知識を
取り上げて解説。図表を多用した2色刷り。2300円



心理学のための統計学 6
パーソナリティ心理学のための統計学
藤崎孝雄・佐藤宏二郎著【構造方程式モデリング】研究論文を
書く基盤を定立し、学会誌に掲載された論文をベースに統計手
法を解説するなど、実践的な内容。2色刷り。2800円

文章理解の認知心理学
川崎康子著【ことば・からだ・脳】心理言語学の研究テーマ
から文章理解について、その心理モデル、推論と記憶、読解過程と
の関係、読解と読解戦略、身体化運動、物語理解の知覚-運動処理、
認知神経科学的基盤としての物象研究などを解説。2800円

**人文・社会科学のための
テキストマイニング**【改訂新版】
植村真実・三浦雄子著 本格的な自然言語と統計
解析を「分かりやすく」「タダ」で行うことを
可能にした画期的な一冊がリニューアル。2400円



読者の時代によって新しい辞典 誕生！

心理学辞典【新版】

編集代表：下山明彦
編集委員：大塚洋介・池田明彦・高木 繁・中村和久
B 1 冊・B 1 冊 1184頁 6800円

本辞典は、字句を独立して立派な辞典、その語句が心理学の概念領域のなかで果
たす役割を中心に解説した画期的な「概念心理学辞典」である。感情・認知・
知覚・知覚など、どの領域で用いられるかで、固有の意味が異なっている
語彙に合わせ、字句の意味だけでなく、それが使われる文脈を重視し、概念
別に解説した。金沢学院をおもった本書を活用することで、発展、進化を続け
る心理学の辞典を創出する。心理学研究家にも最適。

信託書房 〒112-8012 東京都文京区大塚3-20-4 TEL.03-3948-5888/FAX.03-3945-8840【郵送】

日本質的心理学会第 11 回大会準備・実行委員会

大会準備・実行委員長

山田富秋（松山大学）

大会準備・実行委員会メンバー（順不同）

荻田知則（愛媛大学）

田中美延里（愛媛県立医療技術大学）

八木良広（立教大学）

白柿綾（和ホスピタル）

柴田智恵（臨床心理士）

石川良子（松山大学）

白松 賢（愛媛大学）

広告・展示

株式会社 金剛出版

株式会社 新曜社

株式会社 誠信書房

株式会社 せりか書房

株式会社 ニホン・ミック

SAGE Publications Asia-Pacific Pte Ltd

日本質的心理学会第 11 回大会プログラム抄録集

発行日：2014 年 10 月 18 日

発行者：日本質的心理学会第 11 回大会準備・実行委員会

大会事務局：愛媛県松山市文京町 4-2 松山大学人文学部社会学科 山田研究室

印刷：セキ株式会社